

成瀬記念館

2016

No.31

日本女子大学成瀬記念館

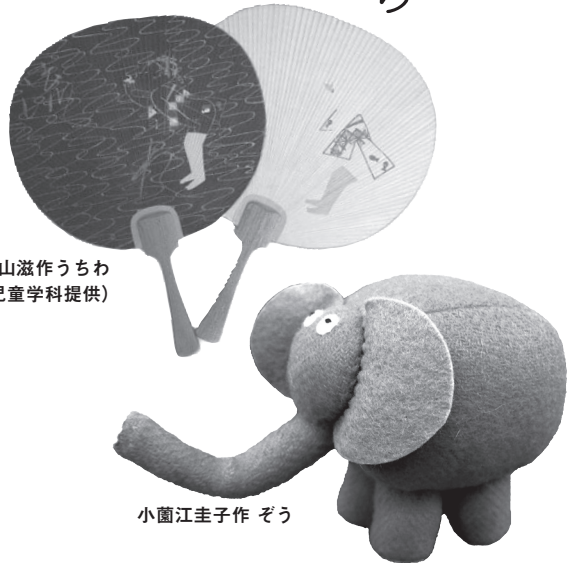
日本女子大学に学んだ

児童文学者たち

二〇二五年九月十五日（火）
十二月二十九日（土）



あまんきみこ原稿



初山滋作うちわ
(児童学科提供)

小藺江圭子作 ぞう

日本女子大学から輩出された児童文学者の中から、石井桃子、中村佐喜子、松田瓊子、いぬいとみこ、小藺江圭子、安房直子、あまんきみこの七名をご紹介します。また、児童学科で昭和二五年度から開講された「児童文学」の担当教授を中心に、与田準一、初山滋、森比左志（森久保仙太郎）、安藤美紀夫（二郎）、吉田新一、百々佑利子について取り上げました。



女子大学校創立の恩人—— 広岡浅子展

2016年1月12日(火)～3月4日(金)
*4月8日(金)まで会期延長

NHK 連続テレビ小説「あさが来た」(2015年度後期)のヒロイン白岡あさのモデルとなった広岡浅子は、成瀬仁蔵の女子高等教育の方針に賛同し本学創立発起人となり、のちに評議員を務めた。

本展では、浅子が成瀬に宛てた書簡20通のほか、自筆の短歌、写真、寄附金簿等約70点を展示した。



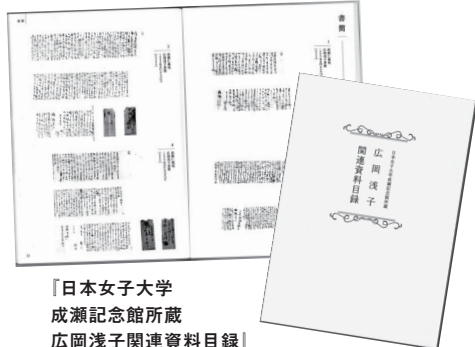
写真を元に再現したドレス



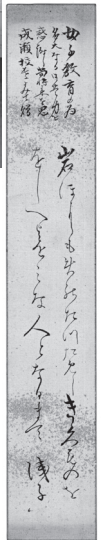
展示室



ポスター



『日本女子大学
成瀬記念館所蔵
広岡浅子関連資料目録』



自筆の短歌



成瀬記念館 2016

No.31

目次

表紙 / カット・武藤良子

	口絵		
	日本女子大学に学んだ児童文学者たち		
	女子大学校創立の恩人——広岡浅子展		
	巻頭言		
	本学の創立に欠かせなかった恩人達……………佐藤 和人 …… 4		
	随想		
	成瀬記念館の展示に寄せて……………百々佑利子 …… 6		
	浅子さんのチカラ……………小川 琢磨 …… 9		
	「女子大学校創立の恩人——広岡浅子展」		
	複製ドレスの制作……………梅原 裕香 …… 12		
	成瀬仁蔵の「国民」と向き合う……………是恒 香琳 …… 14		
	新資料紹介		
	今和次郎に師事した昭和初期の住まいと暮らしの考現学		
	八〇年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文		
	……………林 知子 …… 18		
	Bloom as a leader: 時代を切り拓く卒業生		
	暮らしに根づいた社会運動家奥むめお……………上村千賀子 …… 34		
	未発表資料 37		
	成瀬仁蔵講話 1		
	四十五年度第一学期始業式—明治四十五年四月十日— …… 57		
	二〇一五年度展示の記録（成瀬記念館／西生田記念室）…………… 65		
	二〇一五年度業務日誌…………… 68		

本学の創立に欠かせなかった恩人達

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

佐藤 和人

昨年度下半期はNHKの連続テレビ小説、「あさが来た」で本学の創立発起人のひとりである広岡浅子がモデルとして取り上げられました。テレビ小説はあくまでフィクションであり、史実とは異なる点多々ありましたが、当時の様子が生き生きと描かれていたと思います。成瀬仁蔵と広岡浅子という人間同志の出会いを通じて激しい化学反応ともいえるべき新たな展開が始まったといえるでしょう。人と人との縁や出会いの不思議さを感じる内容ではなかったでしょうか。成瀬記念館で昨年度開催された「女子大学校創立の恩人―広岡浅子展」には二万二五〇〇人という多くの方にご来場いただきました。広岡浅子はまさに本学の創立に欠かせなかったひとりの女性といえます。

さらに、成瀬仁蔵の想いと本質に共鳴し行動をおこした人物で、忘れてはならないのが成瀬仁蔵に広岡浅子を紹介した大和（奈良県）吉野の土倉庄三郎です。山林王と呼ばれた土倉庄三郎は林業の振興のみでなく、道路・水道の改善といった公益事業に私財を投じ地域の発展を図る一方、教育にも深い関心と理解をもっていました。成瀬仁蔵が梅花女学校主任教師の時に娘達の教育を託されたという経緯もありましたが、成瀬仁蔵から女子大学創設の相談をうけた土倉庄三郎は直ちにその計画に賛同し、広岡浅子らに協力を依頼するように助言を与えたとともに、自ら五千円（現在の数千万円）の寄付を納め、さらに計画が実現しなかった場合には、広岡浅子とともにかけた費用のすべてに責任をもち、他の発起人や寄付者には迷惑をかけないと保証し、成瀬を激励したのです。成瀬仁蔵というひ

とりの人間の存在、その情熱と行動が多くの人の心をゆさぶり、新たな運動の実現へと発展していった様子がまざまざとよみがえります。人との出会い、一冊の本との出会い、その力に驚かされるとともに、そのような多くの人々の魂の発露として日本女子大学が創立され、現在につながってきていることをあらためて実感します。ちなみに本年六月に土倉庄三郎翁没後一〇〇年記念事業が吉野川上村で開催され、百回忌法要が営まれます。川上村では今も、「成瀬さんは土倉翁のご葬儀（二〇〇年前）に、何日も山坂越えてはるばるやってきた。誠実な人や」と言い伝えられているそうです（川上村との縁を繋いでくださっている教育学科井上信子教授）。

ところで、成瀬記念館では本年度「天職に生きる―成瀬記念講堂展」の展示がおこなわれました。一九〇六年に豊明図書館兼講堂として建築された「成瀬記念講堂」は実践倫理の講義や告別講演がおこなわれた日本女子大学のシンボルともいえる講堂です。一九二三の関東大震災で大きな被害をうけましたが、翌年には内部の造作を残して木造建築として修築されました。一九六一年に創立六〇周年記念事業として補修工事をおこない、あらためて「成瀬記念講堂」と命名されました。一九七四年には文京区の有形文化財第一号に指定されています。折しも創立一二〇周年となる二〇二一年は「成瀬記念講堂」としての六〇年目の節目を迎えます。学園では二〇二一年のキャンパス統合に先立ち、「成瀬記念講堂」の伝統ある雰囲気をもつまま、内装のリニューアルを含めた耐震改修工事の計画を進めているところです。あらためて創立以来の歴史を振り返り、明日に繋げていきたいと思えます。

二〇一六年六月

成瀬記念館の展示に
寄せて

百々佑利子

広岡浅子展

日本女子大学の正門左手にある端正な成瀬記念館で本年一月から始まった「女子大学校創立の恩人―広岡浅子展」に、多くの来館者がありました。明治の実業家広岡浅子氏は、NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」の主人公あささんのモデルです。女性に最高の教育をという成瀬仁蔵先生の理想に賛同して、我が国初の女子大学校の創立に尽力した一人でした。浅子氏は時代や社会が突きつける困難に挑戦しつづけてきました。その後目白キャンパスで学ぶことになった女子大生たちは、その生

き方をしっかりと受け継いで巣立ち、それぞれの分野で活躍してきました。そのなかに、児童文学者たちもいました。

日本の児童文学者展

「広岡浅子展」の前の展示のテーマは、「日本女子大学に学んだ児童文学者たち」でした。吉田新一先生のご退任後、児童文学の科目を引き継がせていただいた私にはとてもうれしい企画でした。石井桃子さん、中村佐喜子さん、松田瓊子さん、いぬいとみこさん、小園江圭子さん、安房直子さん、あまみきみこさんの写真、経歴、作品等貴重な資料が展示されました。日本の子どもたちが、学校で図書館で自宅の本棚で出会っている作品の数々。ロングセラー、ベストセラー、教科書、絵本や課題図書、おすすめの図書リストの常連という人気作家たちばかりです。見

童文学や児童文化という学科がないにもかかわらず、実りはおどろくほど豊かです。展示で概観できるその世界は、子どもの精神を育む芸術と女子大の創立の理念とのつながりの深さを明らかにしているといえるでしょう。

話がとびますが、児童文学の先進国英国では、古典の多くは、オクスフォード大学やケンブリッジ大学など最高学府の卒業生や教授たちによって著されたものです。一方で日本の古典とみなされる児童文学には、日本女子大学で学んだ女性たちによって著されたものが少なくありません。これはたいそう興味深いデータではないでしょうか。なかでも、英文学を専攻した石井桃子さんの業績は、計り知れないほど大きいといわれます。翻訳、創作、児童文学論、子どもと文学と読書教育など、全ての領域を開拓しつづけた児童文

児童文学者たち

日本女子大学に学んだ



あまんきみこ

安房直子

石井桃子

いぬいとみこ

小園江圭子

中村佐喜子

松田瓊子

と

7名の教員

2015年9月15日(火)～12月19日(土)

開館時間 10時～16時30分(土曜日は12時まで)

休館日 日・月曜日、祝休日



展示パンフレット

学者です。そして石井さんは、百寿者でした。女子大時代の先輩と後輩の人生を描いた長編小説『幻の朱い実』（一九九四年）は、一九〇七年生まれの作者が八七歳のときの出版です。女子大卒業後六〇年以上経ってなおその頭脳は清澄で、学生時代

からのあらゆる状況、感情を鮮明に湛えていたことがわかります。このようにゆるぎない文筆活動をつづけられた情熱、エネルギーの源は女子大時代に見出すことができるといえるでしょう。

その石井桃子さんの写真と記事

が、順路の最初にありました。膨大な作品のなかから選ばれた数点が、ケースの中にひらかれていました。自分のかつての愛読書を探すような素振りの来館者もいましたが、展示室をひとりじめできるほどたくさん石井作品を展示するのはむりというもの。ある知人は、展示室から出ると、全員の方々についてもっと知りたくまりましたといって帰っていききました。そういう動機づけのできるすぐれた展示でした。石井文学の世界から数々の暗示を得てきた読者のなかには、最初の著作『ノンちゃん雲に乗る』（一九五一年）を身につまされる読み方をした人、愛読書リストに石井桃子訳の欧米の作品が並ぶという人も多いでしょう。彼女の訳書であるヴァジニア・リー・パトンの印象深い絵本『ちいさいおうち』（一九四二年）から名前を拝借した書店もあるほどです。

石井桃子さんと同世代で、『雨の日文庫』（一九六六年）に石井桃子、山室静（児童学科教授）らとともに作品が収められている著述家も石井さんのファンでした。『せいめいのれきし』（一九六四年版）の翻訳作業のさいにも科学的な分野で協力をして、石井さんの真摯な好奇心、的確な質問、そして類稀な理解力に心うたれたそうです。

「児童文学」の科目

「児童文学者たち」の展示には、日本女子大学で学んだ児童文学者のほかに、「児童文学」の講座開設前後からの教員の写真や作品もありました。童画家初山滋氏は、児童画の講師でした。宮本美沙子元学長が児童学科の助手さんだった時代です。この含羞の童画家は、第一回目の授業のとき、黒板に鎖でつながれた犬の絵を描くなり黙って教室を出てい

かれました。「助手さんに引っ張られて仕方なく」と学生に絵で伝えたのでしょうか、というのが鎖をもつ人のモデルとなった助手さんの解説でした。初山講師は、毎回教室まで付き添う助手さんに様々の絵をプレゼントなさいました。展示ケースに



展示風景

あったうちわも、のちに宮本先生から児童学科に寄贈されたものです。

学生たちが児童文学にひかれ、研究や創作を続けてきたその歴史は、『海賊』『目白児童文学』『日月』などの、学生と院生と科目担当教員が発行してきた研究誌が語っています。吉田新一先生は、長年日本の絵本学を導き、退任後は軽井沢絵本の森美術館の名誉館長を務めておられます。安藤美紀夫（一郎）先生は訳書『マルコヴァルドさんの四季』（イタロー・カルヴィーノ、一九六八年）によって、児童文学の新しい扉を開いた方です。私の展示ケースには、読書教育家ドロシー・バトラーが成瀬記念講堂で講演をした折の写真がいられていただきました。いまは耐震の関係で使われていない講堂にすわるおおいの聴衆が写っています。

記念館の貴重な資料

博物館や美術館や記念館の集積は、間違いもあるインターネットの情報を、信頼性においてはるかに凌駕します。その貴重な資料にしても、学芸員によって掘り起こされ選ばれ展示されなければ世に伝わりません。長い年月に亘る精緻に徹した努力によって、展示は可能になります。人は見るために足を運んで見たものを忘れません。展示物はひっそりと音を立てませんが、人は忘れがたい経験は声に出して語りたくなるものです。そしてあささんや桃子さんの物語が語りつがれていきます。成瀬記念館から、来館者の数だけ物語は紡ぎだされ、それらが目白の丘に、将来の語り手たちを引きよせるでしょう。

(元児童学科教授 もも ゆりこ)

浅子さんのチカラ

小川 琢磨

読者の多くは、NHKの連続テレビ小説(朝ドラ)「あさが来た」はご覧になったでしょうし、広岡浅子(以下「浅子さん」)のことはよくご存知と思いますので、ここでは、ドラマになる以前のことについてご紹介させていただきます。

まず、「あさが来た」の統括プロデューサー佐野元彦氏(以下「佐野さん」)は、浅子さんとの出会いについて、「二〇一四年初夏、大阪の図書館で『小説 土佐堀川(復刻版)』を目に留めたことがきっかけ」とおっしゃっています。

この佐野さんが目を留めた『小説 土佐堀川(復刻版)』(初版は一九八

八年)は、二〇一二年、大同生命創業一〇周年事業として、出版社と著者の古川智映子氏(以下「古川先生」)にお願ひし、復刻していただいたものです。なお、「土佐堀川を復刻してもらおう」と思い立ったのは、大同生命の当時の社長喜田哲弘でした。喜田社長は、それより遡ること一〇年前の創業一〇〇周年時、



『小説 土佐堀川』左から初版(1988年)、復刻版(2012年)、新装改版(2015年)

企画部長として浅子さんを知ることとなり、その頃から、「浅子さんを世に出そう」と思っていたそうです。

さて、浅子さんは、朝ドラのヒロインのモデルとなり、一躍有名人となりました。皆さん「こんな方が歴史に埋もれていたとは驚きですね。」とおっしゃっていただきます。佐野さんも、出会ったときは素直にそう思ったようです。しかし、実は、古川先生以外にも幾人かの方は浅子さんに既に着目していました。その方々を紹介します。

一人目は日本女子大学出身の高橋阿津美氏（以下「高橋さん」）です。高橋さんは『大正期の女性雑誌』（一九九六年初版）に「実業家 広岡浅子 日本女子大学の援助者」という論考を発表されています。史実を丹念に調査されてまとめられたこの論考は、多くの示唆があります。私は特に、三井家と浅子さんの関係

について多くを教えてくださいました。

二人目は、小説家玉岡かおる氏（以下「玉岡先生」）です。玉岡先生は、浅子さんの女婚恵三氏の実妹・柳満喜子氏（以下「満喜子さん」）を主人公とした『負けんとき』を二〇一一年に出版しました。その中で、満喜子さんの人生に非常に重要な影響を与えた人物として浅子さんを描きます。タイトル『負けんとき』は浅子さんが満喜子さんに言った言葉です。玉岡先生は、数年にわたる入念な調査を踏まえて書き上げたようです。私が浅子さんのことを調べる先々で「前に小説家が調べていた」ということをよく聞かされたものです。

三・四人目は、同じくNHK朝ドラ『花子とアン』二〇一四年前期のヒロインのモデルとなった村岡花子さんの生涯『アンのゆりかご』村岡花子の生涯』の著者村岡恵理氏（以

下「恵理さん」とそのお姉様で日本女子大学出身の村岡美枝氏（以下「美枝さん」）です。恵理さんは、『アンのゆりかご』を執筆する中で、浅子さんに出会います。そして、浅子さんと村岡花子さんに導かれるように二人の関係を辿り、ついに浅子さんが開催していた二の岡の勉強会に村岡花子さんが参加していたことを知ります。そして、前出の著書で、浅子さんのプロフィールとともに、「花子は自分の探求する文学を、自分ひとりの世界にとどめずに社会に還元していく、という意識を浅子から得たのである」と浅子さんが村岡花子さんに与えた影響の大きさを紹介するのです。また、美枝さんは『赤毛のアン』の原書を村岡花子さんに託したミス・シヨーが一時帰国の折、著した本の中に浅子さんの生涯について書いた章があるのを見出し翻訳されました。

実は、桜楓会理事長の蟻川先生もそのうちのお一人です。蟻川先生は、『小説 土佐堀川』をお読みいただき、やはりその生涯に魅了され、本当に色んなところで浅子さんのことを紹介していただいたと聞いております。

いずれの方々も、浅子さんを知り、そのパワーあふれる生涯に感嘆し、魅了され、著書以外のいろんな場面でも浅子さんのことをご紹介いただいた方々です。

私共大同生命は、創業一一〇周年事業として、『小説 土佐堀川』の復刻とともに、保管していた「加高屋」（浅子さんの嫁ぎ先）の古文書を大阪大学に研究寄託し、その成果も含めて、特別展示「大同生命の源流」として、二〇二二年七月より、毎年七月下旬から九月末まで一般公開を行ってきております。ドラマ化決定前は今ほど多く来場者はありま



「大同生命の源流」展示会場

せんでしたが、「浅子さんのことをこの展示ではじめて知ったわ。すごい人やね。」と声をかけていただく方も少なからずおられました。そういった方々もきつと、その感動を身近な人に発信していただいたのでしよう。年々来場のきつかけとして「知人・友人」「ネット」をあげる人が増加してきておりました。

今回のドラマ化の直接のきつかけは、佐野さんが、『小説 土佐堀川（復刻版）』と出会ったことです。しかし、きつとご紹介したようなことも伏流水となり、ドラマ化、そしてドラマの大成功へとつながったに違いないと思っております。まあ、そもそもは浅子さんが持っている「水庄」の高さであることは間違いありませんが……。

さあ。ドラマも終わりました。浅子さんも再び歴史の中へとフェードアウトしていくことになりそうです。今度はいつ、どんな風に世の中においていただけるのでしょうか。浅子さんは、まっすぐでしなやかな「竹」が好きだったとのこと。きつと「せや、こんど竹の花が咲く頃がよろしゅうおますな」とはぐらかされそうです。

（大同生命保険株式会社広報部長
執行役員 おがわ たくま）

「女子大学校創立の恩人 — 広岡浅子展」

複製ドレスの制作

梅原 裕香

初めて洋装の広岡浅子の姿を見たのは、成瀬記念館二〇一〇年夏の展示「軽井沢夏季寮の生活—三泉寮と三井家」展の準備をしているときであつたと思う。私が成瀬記念館に勤務した初めての夏だ。それは袴姿の学生の集合写真の隅の方でテニスラケットを持つて立つ、真つ白なドレス姿であつた。白黒写真の中でもそれはもう、かなりのインパクト。目を惹く姿であつた。

それから五年ほど経ち、広岡浅子は世の中の多くの人々に知られる存在になった。記念館の事務室内には

「浅子のコーナー」ができた。そして、「女子大学校創立の恩人—広岡浅子展」のために浅子の服の複製を作つてほしいとの依頼がきた。話題の展示により大忙しになる直前に退職するにあつての卒業制作として私は引き受けた。

数々の写真の中から好きなものを選んで作つていいよ。とのことだったので、いくつかの写真の中から、私はごく単純に自分の好きなデザインのものを選んだ。それは、屋外をイメージした背景、日傘を持った姿のものであつた。これは日差しが強い夏



のドレスなのか、とにかく社交場で美しく魅せるためのドレスというよりは、アウトドアのための衣服であることは間違いなさそうだ。色々な想像を膨らませてみる。スカートの丈は、靴がしっかりと見える程の長さ。写真を見ながら、私は一八六〇年以降にイギリスの女性たちの中で流行した、登山や旅行の際に着用された衣服に近いイメージなのではないかと考えていた。その後、軽井沢で撮影された、同じドレスを着た浅子の写真があるとの情報が寄せられた。それからは写真とにらめっこしながら素材を考えたり、写真には写っていない背面のデザインはどのようなになっているのかを考えたりする日々が続いた。

素材は夏服をイメージしていたため、当初はざっくりとしたシャリ感のある麻を想定していたのだが、思い通りのものがなかなか見つからな



かったため、サマーウールを使うことにした。色は暖色系であると考え、ワインレッドの様な生地も検討したが、やはりシンプルに茶色を採用した。本当はホームスパンの様な生地に白い糸が混ざっていたらもっと雰囲気が出たな、と少し残念なところである。

ドレスのデザインの中で最も印象的だと感じたのは縦に入った白いラインである。そのラインがどのよう

に作られているのか、じいっと写真を見て、時に虫眼鏡を使って写真を見て、結構悩まされた。この白いライン、特に袖の部分は生地の耳に白いラインが入っており、その部分を贅沢に使用しているのか。とも思ふほど生地との境目が滑らかであったし、自然であった。首から肩にかけての四本のラインと、袖の二本のラインは別物の様に見えた。しかし、今回の複製においてはすべて生成り

のパイピングテープを使用した。そしてもう一点、デザインにおいて悩んだのは背面である。前面の白いラインは、背面ではどのようになっているのか。しかしそればかりは資料がないため自身で想像してしまふほかないのだが、実はそれは少し気楽で楽しいことでもあった。前面で縦に走る白いラインは、背面でまっすぐ下におろすのか。または背面で横方向に通って左右のラインとつながっているのか。とはいえ、私の頭の片隅には登山服のイメージがあり、以前見たことのある登山用ケープの存在があった。そのため、袖はそのまま背面でケープになることばかり考えていた。よって背面は横方向に白いラインが走っている。サイズは写真とウエストやヒップのイメージは異なるが、展示するにあたって九号サイズで作っている。

展示は会期を一月以上も延長する

ほどの盛況ぶりです、私が見学に行った際も一〇〇メートル以上もありそうな列が館外にまで伸びていた。新聞やテレビでも多く取り上げられ、ドレスも度々紹介されていた。ドレスの制作は、「これでいいのだろうか」と不安との戦いであった。しかし、写真を見ながら思いを巡らせることは楽しい作業でもあり、完成させたことへの達成感もあった。そして多くの人に見てもらえたことは大変嬉しいことであった。

このような機会を与えてくださった成瀬記念館に感謝致します。予想を超える見学者に対応されていた成瀬記念館のみなさまお疲れ様でした。

(二〇〇八年 被服学科卒業)

元成瀬記念館非常勤スタッフ

うめはら ゆか

成瀬仁蔵の

「国民」と向き合う

是恒 香琳

日本女子大学附属高等学校は、自治活動が盛んだ。全生徒が自治手帳を持ち、役職に就く。規約も生徒自身が、毎年審議し、必要あれば改正していく。通学服も生徒たちが話し合いで決める。全校集会も、運動会も文化祭も、生徒が主体となって、企画そのものから手作りをしている。先生と生徒が、対等に話し合いをする。創設者・成瀬仁蔵の「自念自動」という言葉の中身を、先生や生徒たちが代々、吟味し磨いてきた伝統があるからこそ、成り立っているのだろう。

私はこの「自治」に惹かれて、日

本女子大学附属高等学校へ入学した。

教育というのは、啓蒙になりがちだ。子どもは半人前として扱われ、先生に与えられた課題を達成していくことで、はじめて一人前に近づいていく存在と見なされる。



附属高等学校の自治手帳 (2009年度)

たとえば通っていた中学校で「クラスで団結して、ペットボトルでエコアートを作る」という課題が出されたことがある。子どもたちに許される自主性や個性は、せいぜい「材料を集め、作品をつくること」だ。それが本当にアートと呼べるのか、それがエコなのか等の意見を持つことは、理解力や協調性がないという烙印を押される。自分自身の問題意識から試行錯誤したり、学習したりすることは、よそ見だとか無価値だとされる。子どもは学びの主人公でありながら、学びの主体であることは期待されてこなかった。子どもは啓蒙される側として、常に受け身なのである。

私が「自治」を求めたのは、そうしたことへの反発からだ。学びに対して主体的であるために、学校という生活の場の作り手になりたかったのだ。先生や大人に、取り組

むべき課題を与えられるのではなく、自ら取り組むべき人生の課題を見つけ、探求していきかけた。

成瀬仁蔵が「自念自動」という教育理念を掲げ、日本女子大学をつくった時代は、日本が近代国家になるべく邁進している最中だった。幕藩体制から近代国家への移行によって、交通は発達し、標準語が普及し、全国市場が成立し、文化の均質化が進んでいった。そうして、藩や村を超えた「日本」という意識が成立していった。徴兵令（一八七三年）や大日本帝国憲法（一八九〇年）が施行され、日清戦争（一八九四―九五一年）、日露戦争（一九〇四―〇五年）と戦争が相次ぎ、ナシヨナリズムはますます高まっていった。

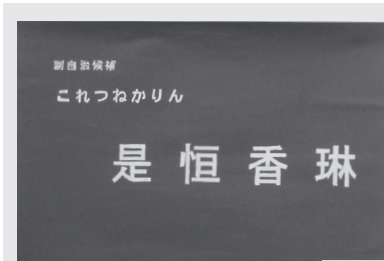
こうして「国家」と「国民」が形成されていくなか、成瀬は半人前とみなされた女性たちを、「国家」の作り手たる「国民」の一員として期

待した。そして、女子を人として、婦人として、国民として教育することを提言し、実行した。

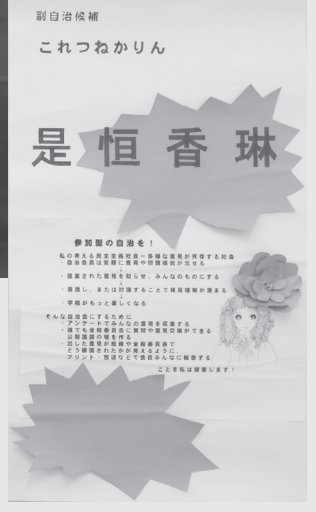
私は今、「女子を国民として教育する」と言ったときの、「国民」とは何だったのかを知りたくて、成瀬仁蔵を研究している。

第二次世界大戦後は、戦争への反省から「国民」という言葉は、避けられるようになった。「国民」という言葉は「非国民」という言葉と対になり、時の権力者への協力者・貢献者としての意味合いを帯びるようになってしまったからだ。権力者に逆らう者は、「国民」ではないと見なされ迫害される恐怖、自ら主体的に権力者の求める「国民」に迎合していくことの簡単さを、私たちは知った。

だから、昨年の夏に若者たちが「言うこと聞かせる番だ、国民が」と国会議事堂に対して声をあげた時も、



高校一年生の時、
作成した選挙ポスター



規則改正案回収箱

「国民という言葉を使っただけではいけない」「今の若者の右傾化が進んでいる」「戦争を知らず、反抗を知らない」という批判が起きた。

しかしその時の状況は、安倍晋三首相が「国民の理解が進んでいない。理解が進むよう努力したい」と言っており、安全保障関連法を強行採決していくさなかだった。その状況に対して、若者たちは「国民」という言葉を使ったのだ。つまり、主権者は「国民」であり、説得され啓蒙される対象ではないという意志表明だった。私たちは、自ら考え、意見を突き付ける権利を持つ一人の人間であり、この国の作り手なのだ。「国民」とは、そういう意味だった。

では、成瀬仁蔵にとつての「国民」とは、なんだったのだろうか。それは、若者たちが使った「国民」と同じように、その時の状況と照らさなければ見えてこないものだ。

一九一九年に成瀬は亡くなり、その後、日本は悲惨で無謀な戦争へと歯止めなく転がっていつてしまった。その時の「国民」は総動員で戦争に参加した。

もちろん、参加や協力という言葉に片付けられないものはある。抵抗した人もいた。しかし、それでも多くは積極的に大政翼賛に与したのだ。日本女子大学も、戦争協力の歴史を持っている。成瀬の「国民」という言葉も、時代の状況のなかで当然、変化する。

私は「日本女子大学校歌」が好きだ。附属高等学校に入学して、初めて歌ったときに、驚き感銘を受けた。この校歌は、敗戦から三年後、一九四八年の大学昇格記念式典で祝歌として発表されたという。「ここに生まれて日本の文化をおこす使命あり」「自由の鐘の鳴るところ自治の光をかかげつつ理想にもゆるる若

人よ声たからかに進まばや」という言葉には、戦争を経た反省と決意がこめられているに違いなかった。この国を、私たちの手に取り戻そうという気概だ。国が国民をつくるのではなく、国民が国をつくる自治への決意だ。

成瀬が大学で行った「実践倫理講話」には、自奮・自念・自学・自習・自動・自治などの言葉がよく登場する。それらは、国家が作られ、国民が形成されていく時代のなかで、必要なものだった。みんな、国家と社会をつくるとはどういうことか、近代とは何かを、初めて模索した時代だった。

私は附属高校時代、自治活動に打ち込み、自治委員長をして、わかっていたことがある。自治活動を担う生徒たちが、学校の高等小使にならないためには、権力に対してつねに緊張している必要があるということだ。

そして共同体づくりの在り方を、批判的に検討し続けることだ。

成瀬の生きた時代と、今はとてもよく似ている。グローバル化が激しさを増し、またそれに伴ってナショナリズムが高まっている。私たちは、再び「国民」という言葉と向き合っている。

(日本女子大学大学院

文学研究科史学専攻修士二年

これつね かりん

新資料紹介

今 和次郎に師事した

昭和初期の住まいと暮らしの考現学

八〇年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文

林 知子

はじめに

一九三六（昭和一一）年三月、日本女子大学家政学部を卒業した小林孝子（以下孝子とする）の卒業論文「考現学より見たる一家庭」が、二〇一五（平成二七）年五月二一日、工学院大学の図書館から七〇余年ぶりに母校、日本女子大学に返還された。昭和初期の一家庭の所持品の全てを調べ、住まいと暮らしの全容を記録した貴重な資料として成瀬記念館に収められた。

この卒業論文は、工学院大学図書館に移管、保管され

ている今和次郎（以下今とする）の資料棚の片隅で、埃をかぶった風呂敷包みのボール箱の中から発見された。

孝子が日本女子大学の家政学部に入學したのは一九三二（昭和七）年、四年生に進級して卒業論文に取り掛かる事になったのが一九三五年の春である。その時、孝子は寮監であった井上よし子に相談するが、井上は、家政学部で非常勤講師をしている今に相談することを勧めた。今の講義「形態美論」に魅せられて、二年に亘って受講していた孝子は早速、今に相談した。「あなたの

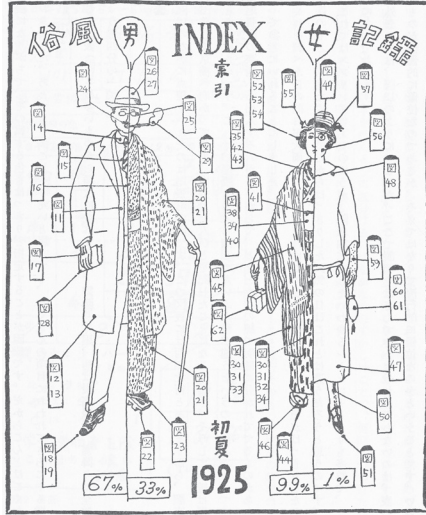
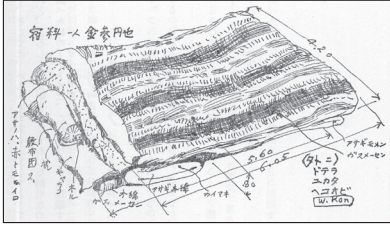


図-1 今和次郎の考現学 上：統計図表索引（「風俗総合調査」）／左：寝具の図（「住居・室内」）いずれも『今和次郎集 第1巻 考現学』より転載

家にあるものをすっかり描きあげてみてはどうか」という助言を得て早速、今と吉田謙吉との共著である『モデルノロデオ(考現学)』や吉田謙吉の『舞台装置者の手帳』を参考にしながら、自分の家にあるものを描きだすという途方も無い作業に取り掛かった。孝子の自宅は横須賀にあり、毎日の通学には遠す

ぎるため寮生活を送っていたので、その作業は夏休みに入ってから連日続けられた。九月以降は土曜日の午後と日曜日を横須賀に帰って調べ続け、描き続けた。一九三六年三月、一旦、大学に未完成のまま仮提出をしたが、再び借り出して卒業後の日々もこの作業を続け、二年後に完成させて一九三八年、正式に提出したという。「自分の周囲にあるありとあらゆる物象について克明に描きつづけた」という孝子の研究はタイプライター用に紙に黒ペンで描かれた一五九枚のスケッチからなっている。その描写は精緻を極め、絵画のごとく美しい。これを見た今は「自分の住んでいる環境をこれだけよくかき上げたのは驚異です。型破りの論文ですが、ここから物にたいする批評力が湧き出るのだと思います。更につき進めたならば、ファールブルの生物研究のような成果が期待できそうです」と絶賛した。

明治の末から大正、昭和初期にかけて都市に暮らした一家族の生活の全容を克明に記録した孝子の自家調査は、サラリーマン家庭の暮らしの一端を知るだけではなく、大正から昭和にかけて西欧文化の影響を受けて近代化の道を辿りはじめた家庭生活の様子を知る手掛かりとなるものである。孝子は「百年前のしらべものがあつたらどんなに貴重か」という寮監の言葉に励まされている

が、この研究が行われてからすでに八〇年余りが経過した。この貴重な資料は私たちに何を語りかけてくれるのだろうか。日本女子大学の成瀬記念館の中に収められたこの論文は、多くの後輩や研究者の手でひも解かれて、更に深い研究がおこなわれることを期待せずにはいられない。

では、なぜ日本女子大学に提出されたはずの論文が工学院大学図書館に紛れ込んでいたのだろうか。今の資料整理に当たっていた「今和次郎コレクション委員会」のメンバーが、二〇〇三（平成一五）年、八七歳になられ、一人住まいをされている孝子を横須賀の自宅に訪ねて、この論文が工学院大学に移管された今和次郎の資料の中にあつたことを伝えた。孝子は大変喜び、忘れていた記憶を辿ってそのいきさつを語ってくれた。「太平洋戦争が熾烈を極め、都市への空爆が始まり、都心にある日本女子大や横須賀の自宅はいつ戦火に巻き込まれて焼失しても不思議ではない状況になった。精魂込めて描きあげたこの卒論をどうしても守りたいと思い、大学から借り出して、卒業後も親しく付き合っていた今先生にお願いして、先生の東京郊外の自宅、保谷に疎開させて戴いた。戦後の混乱の中でどうなってしまったのかと気にはなっていたがそのままになっていた」というのが実情

だった。

今の没後、書齋にあつた膨大な資料は工学院大学に移管されたが、その資料と共に孝子の論文も一緒に工学院大学に移されてしまったわけである。その後、今の資料整理に当たっていた「今和次郎コレクション委員会」は孝子の了解を得て、二〇〇四年六月、成瀬記念館で身の回りの品々と共に「昭和初期の住まいと暮らしの考現学」と今和次郎に師事した小林孝子の自家調査」という展示会を開催した。だが、終了後この論文を再び工学院大学に戻してしまった。二〇一五年三月、「今和次郎コレクション委員会」が解散するに当たり、今の考現学の資料と共に工学院大学に保管するのがよいのではないかという強い意見もあつたが、本来は日本女子大学に提出された論文であり、返還されるのが妥当ではないかということから、ようやく母校に還り成瀬記念館に保管されることになった。

今和次郎の考現学と小林孝子

孝子の卒業論文は今の指導による自家調査であり、「考現学的研究」手法を使ったものである。孝子が学んでいる日本女子大学家政学部には当時、第一線で活躍する多数の建築家や大学教授が非常勤講師として招かれ、新し

住まいについての指導を行っていた。早稲田大学の教授である今和次郎もその一人で、一九二七（昭和二）年から来校し、「形態美論」という講座を開講していた。孝子は今の講義を二年にわたって熱心に受講していた。「形態美論」がどのような内容の授業であったか定かではないが、今が一年に亘るヨーロッパ視察を終えたのが一九三一（昭和六）年で、ヨーロッパの建築を多数見聞し、建物を彩る写真や絵ハガキ、スケッチを持ち帰っている。早稲田大学では戦後ではあるが、「建築装飾、建築美学」を担当し、今が見事なタッチで黒板に装飾画を描き、それを学生が模写するという演習の授業があったという。形態美論がそれに近いものであれば、スケッチが得意な孝子にとって楽しい時間だったはずである。

一方、今は学生ばかりでなく若い教師たちにも人気があり、今の控室はいつも若い女性たちで賑わっていたという。年配の教師にはそれが、「どうしてなのか分からなかった」ようである。当時としては今の生き方は独特であり、その風貌や、何時もジャンパーを着ていることにも賛否が分かれていたのだろう。だが、若い女性たちにとって、大正デモクラシーを体得し、自由と平等を信条とし、女性を差別しない今の生き方は、日本の男性の中にあって理想の男性に映ったのではないだろうか。そ

して今は一九二八（昭和三）年、四〇歳で日本女子大学の卒業生、井上とし子と結婚した。

そこで、今の経歴を見て行くことにする。

今和次郎は、一八八八（明治二一）年、青森県弘前市で医者の子成男と母きよの次男として生まれた。弘前市立東奥義塾中学校を卒業後、一家は東京に転居し、今は東京美術学校図案科に学ぶ。卒業は一九二二（明治四五）年、開設間もない早稲田大学建築学科の助手に採用された。二年後に講師、翌年助教、五年後には三二歳の若さで教授となる。

一九五九（昭和三四）年、七一歳で定年になるまでの四七年間を研究と学生の指導に当った。一九七三（昭和四八）年、八五歳で生涯を閉じた。⁽⁵⁾

今は東京美術学校卒業後、柳田国男、佐藤功一らの主宰する白茅会に参加して古民家保存を趣旨とした民家調査に参加する。ここで建築学、民族学、地理学、歴史学、経済学、人文地理学等の他分野の研究者と出会い、一九一八（大正七）年には神奈川県農村において共同調査を行っている。これらの一連の農村調査は今の研究生活の出発点となっている。その後『民家図集』や『日本の民家 田園生活者の住家』等、民家に関する著作を多数発表している。

今は「農村の住宅調査や住宅改善の仕事をするようになり、次第に考現学という方向に考えを進めるようになった……」と後に述べているが、他分野の研究者との出会いの中で、農村住宅を建築的な側面だけではなく、そこに住む人々の暮らしとその環境を細かく観察し記録し続けた。

考古学が過去の対象を研究するものであれば、現在、目の前にある対象を対象にして記録研究する学問を考現学「モデルノロジオ」と名付けた。特に関東大震災以後、廃墟と化した東京で人々が建てたバラックを調査した。無の状態から人々が生活を組み立ててゆく様子や表現の仕方至今已強い関心を持ったようだ。銀座の道行く人々の風俗調査「一九二五年」や、銀座のカフェーの女給の衣装「一九二六年」を始め、人間の営みのあらゆる面を対象にして調べ続け、記録し、分析した。

一九二七（昭和二年）、新宿・紀伊國屋画廊で開催された「しらべもの（考現学）展」は世間の注目を集めた。一九三〇年に、吉田謙吉と共編の『モデルノロヂオ（考現学）』が春陽堂から、一九三一年には『考現学採集（モデルノロジオ）』が建設社から出版された。今は新婚家庭の持ち物調査や四畳半の間借生活者の持ちものの調査も行っている。孝子の卒業研究は、都市中産階級のまだ

誰も手をつけていない暮らしの調査で、今は「あなたの家にあるものをすべて描きだしてみてもどうか」という提案をした。そして孝子はその期待に十分に応える研究を完成させた。

孝子は、考現学的な調査に夢中になり、来る日も来る日も描き続けたというが、今の指導を受ける中で、今の人間的魅力にも触れ、日ごとに尊敬と親しみの念を深めたのではないかと思われる。卒業後も今の家に足しげく出入りして、家族とも親しくなり、特にまだ幼かった長女の治子を可愛がった。孝子と治子の親交は孝子が亡くなるまで続いていたという。孝子の家族は一九三八（昭和一三）年に、横須賀市大津に今に依頼して自宅を設計してもらった。上棟式には、今は妻と幼い長男を連れて参加したという。孝子はその後結婚するが一九四六年からの三年間、日本女子大学に戻って新泉寮の寮監を務めている。その後、幸いにも戦災に遭わなかったため、再び横須賀の実家に戻ってこの家に住み続けた。私どもが訪問した二〇〇三年、孝子は「今先生に設計していただいた当時のままで」使っていると語って家の中を案内してくれた。その後、孝子が老人ホームに入り、この家は取り壊されたという。

孝子の卒業研究

「考現学より見たる一家庭」

昭和拾参年四月拾参日 家政二類 四年 小林孝子

孝子の卒業研究には右のような表題が付いている。一五九枚のタイプライター用紙に黒ペンで描かれたスケッチが、ラシャ紙の台紙に貼られて折本形式になっている。これを台紙の大きさに合わせて作らせた特製のボール箱に入れた。箱は年賀状から剥がした切手を張り込んで装丁している。

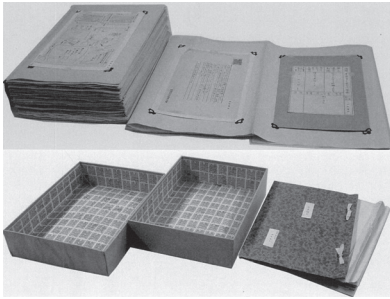


図-2 卒業論文と論文が収納されていたボール箱

両親の結婚が始まる小林家の歴史は、明治末から大正、昭和の初期まで約二五年間で、その間に蓄積された家財一切を包み込んだ住まいと生活用具の全てが調査の対象となっている。孝子は「一家庭について、そこにあるありとあらゆるものを記録し、いわく因縁をただし、不思議に思われるものにつ



図-3 小間物類(櫛)

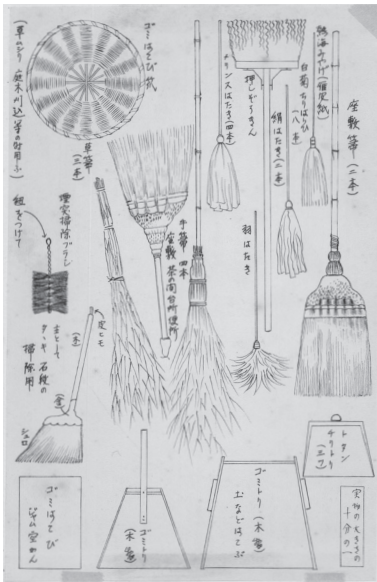


図-4 箒とちりとり

いてはそのまま正直に書いた」と記しているが、一家の収入から税金の金額、来訪者、電話の授受、最後に論文作成中に亡くなった祖母の葬式一切の様子まで細かく記録されている。

この他、布地の切れ端見本が添付されているが、それぞれの布についてその利用歴が可能な範囲で追跡されている。

家族構成

孝子の家族は、海軍兵学校を出て横須賀の海軍に勤める父（調査当時は退職して、東京電燈株式会社の社員）、母は女子高等師範学校を出て女学校の家事科の教師をしているという高学歴の両親と祖母（母の母）と孝子の四人で、子どもは孝子が一人という極めて少人数の三世代家族で、それに女中を加えての五人暮らしであった。家事は女中を使いながら祖母が担当していた。母が職業婦人（当時の職についている女性の呼び方）であったため、孝子の養育も祖母の手に委ねられていた。掃除、洗濯、炊事、子守は手間暇の掛かる労働であり、一般家庭でも専業主婦とそれを補助する女中の存在は欠かせなかった。女中は、家事見習い、家事手伝いとも言われていたが、若い女性の職業の一つ、農村がその供給源となつて

いた。戦争が激しさを増してきた一九三九～四〇年ごろから軍需工場が女性の手も必要とするようになって、女中を雇うことは困難になったが、孝子の調査はその少し前の事である。

住まいと住まい方

孝子の家族、小林家が軍港に近い横須賀市の深田町に居を構えたのは、父が海軍の軍人であった関係からであった。住まいは、資産家が一九二二（大正元）年に建てた別荘を借り受けたもので、当初の家賃は一七円であったが、一九二一（大正一〇）年、この家を四千円で買い取り、持ち家にした。よく吟味された建築材料を用いて丁寧に施工された純和風建築であった。

木造平屋建て、敷地六一・九八坪、建物二一・一八坪、畳敷きの部屋は一〇畳の座敷に六畳の次の間、六畳の茶の間の三部屋で、他には玄関、台所、風呂場、板の間、縁側などである。ここに両親、祖母、孝子、女中という五人の大人が暮らしていたわけである。二一・一八坪とは八六・四四平方メートルの事で、都市に見られるやや広めの3LDKマンションの面積に近い。だが、小林家の場合、居室となる三部屋の合計面積は三二平方メートルで、残りの五四平方メートルは台所、風呂場、玄関、

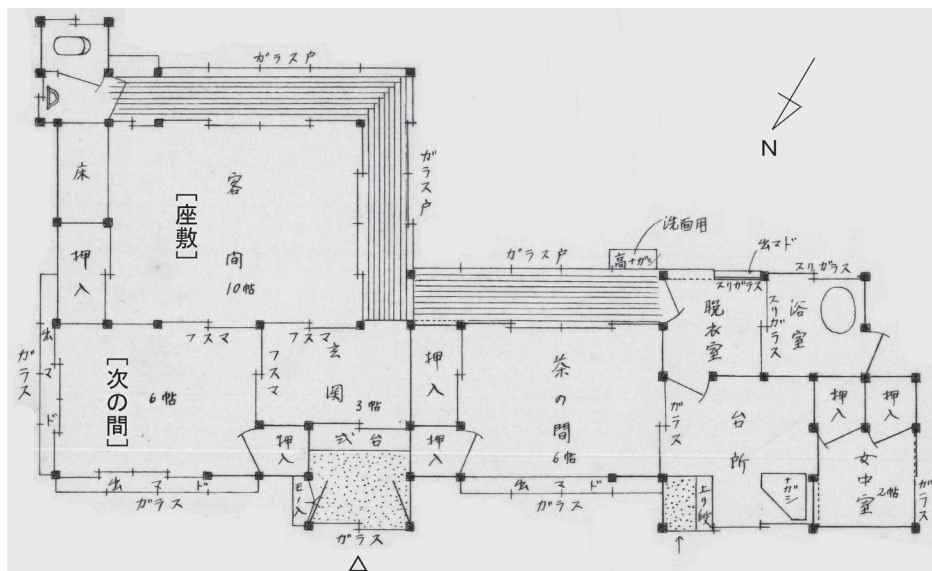


図-5 調査の時点で住んでいた横須賀市深田町の家の平面図

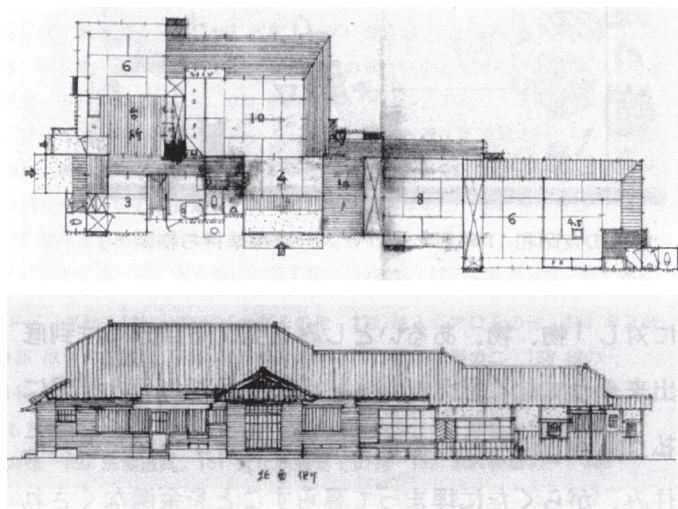


図-6 今和次郎が設計した横須賀市大津の家の平面図(上)と立面図

廊下である。
 孝子の描いた間取り図と、そこに書かれている各部屋の使い方、置かれている家具やその他のものの詳細な配置を見るとかなり過密な状態であることが分かる。

一〇畳の座敷は小林家唯一の接客空間であり、同時に夫婦と孝子の寝場所でもある。若い娘たちが集まって、茶道、華道、盆景などのお稽古ごとをする場になり、母の書斎、休日には父の居場所にもなる。

次の間六畳は祖母の寝室であるが、家族の衣類の置き場、タンスが三棹置かれて納戸の役目も兼ねている。台所に続く六畳の茶の間は家族の居間であり、食事、だんらん、祖母や女中の和裁の場であり、台所の延長としての煮炊きの場にもなっている。更に夜間は女中の寝場所でもある。孝子の勉強場所は玄関の三畳の間が当てられていた。従って各部屋では様々な生活行為の重複があり、動線は錯綜して日常生活をする上かなりの混乱が生じていたのではないかと思われる。

一九三八年、今に依頼して設計した家は、伝統的な和風様式を踏襲しているが、居間や台所、夫婦寝室等を玄関の左に、接客部分を右側に集めて生活行為の重複や、動線の混乱を避けている。

台所改善

小林家では、関東大震災以後、水道が敷設されたのに合わせて台所の大改造が行われた。主な改造箇所は、次に挙げる①～④で、当時の台所改善の指針で指摘されて

いた箇所の殆どが直されている。

⑤～⑦は可動の設備用品で、各家庭がぜひ欲しいと望んでいた水冷蔵庫や大型食器戸棚、天火も入っている。断水時の水槽もあるが、当時は断水の心配があったのだろうか。

⑧は新しい調理用の電熱器具である。これらは台所ではなく、茶の間で使用されていた。

- ① 北西の壁を壊して明るいガラス窓とする
- ② 流し台を座り流しから、二～三人が同時に使える五角形のコンクリート立ち流しに変える
- ③ 調理台を可動式に
- ④ 床下にコンクリートの大きな物入（糠味噌、炭等の収納用）
- ⑤ 水冷蔵庫と天火
- ⑥ 特注した大型食器戸棚
- ⑦ 断水に備えたトタン製の水槽
- ⑧ 調理用電熱機器四点

家事の合理化に繋がる電化製品は、文化生活の象徴的な機器で、孝子の家では関東大震災以後、万能電気七輪を五四円で購入しているが横須賀では初めてであったと

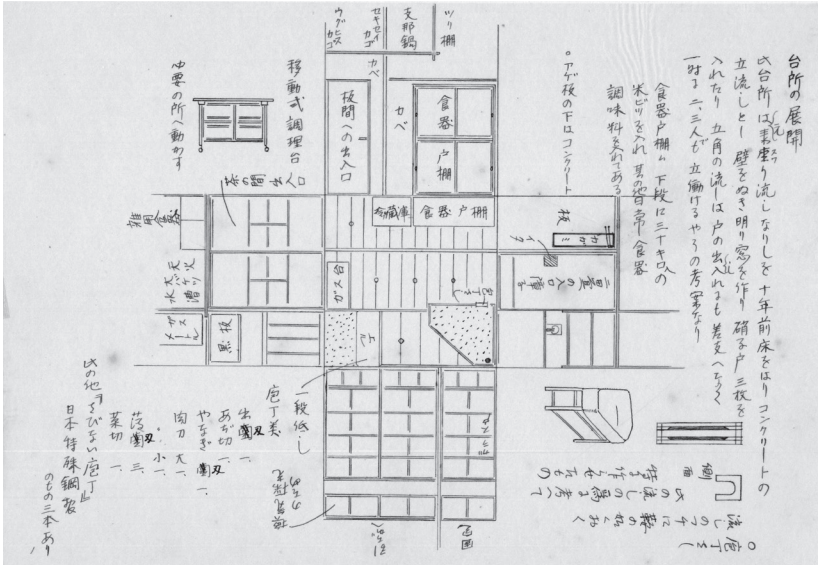


図-7 改善された台所の平面とももの配置

いう。その他五〇〇ワット、一キロワットの電気七輪、五キロワットのオーブンも入れている。一般家庭にとつては高嶺の花だったに違いない。小林家では、母の強い希望と父が電燈会社勤務していたという関係もあって、このような電化製品が数多く所有されることになったのであろう。

台所改善は女性の地位の向上のためにも、住宅改善の中心課題であった。だが、土間の部分を床の上に、座り流しを立ち流しに変えるのが一般家庭での台所改善だったが、小林家では全面的な改善を行っている。

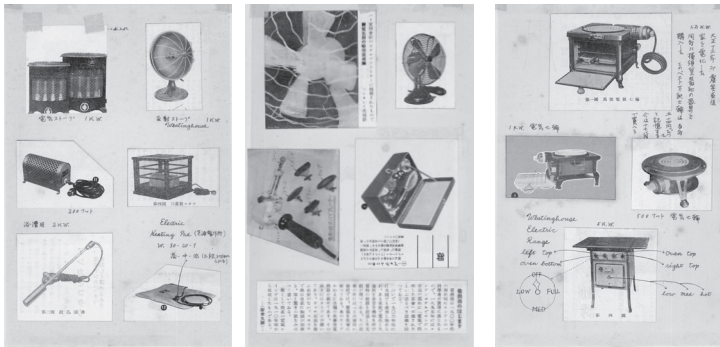


図-8 小林家で所有している電熱器具

調理用具と食器

シチューパン、食物裁断機、ポテトマッシュヤー、泡立て器、アイスクリーム器、紅茶セット・六客を三組、スプーン・フォーク各二二本・ナイフ六本、フィンガーポール六個など二四種類一五〇点の洋食器、この他に、従来から所有している和食器五八種類四五五点、お盆三七枚、鍋類一三個、包丁類一三本、天火、米研ぎ器、岡持ち、醤油の空だるなどまであり、孝子が調べ書き出した食に関する調理器具や食器類の種類と数は無数である。では一般の家庭ではどうか。三重県の官吏の家庭の持ち物調査が、一九三三（昭和八）年の『婦人の友』に掲載されているが、食器類で三三種、一八二点とあって、小林家の四五五点は比べ物にならないほど多い。従って炊事道具、食器類の収納は各部屋の物入れや吊り棚に分散してしまうという状態になっている。

小林家の食事 一週間の献立から

孝子は、八月四日から一〇日までの一週間のメニューを採り上げて記録している。

朝食はご飯に味噌汁と海苔や昆布など添えられた簡単な献立である。だが、毎日、トマトやリンゴ、牛乳が付いて栄養のバランスを考慮したものになっている。

昼は御飯に酢の物か煮物、または焼き魚などで朝食と大差はない。

夕食はご飯に副食として、ビフテキに粉ふき芋、炒め葱、生鮭のフライに里芋の煮ころがし等と、洋と和の料理が同時に出されている。それにデザートとしてアイスクリームやスイカ、メロン、水蜜桃などの果物も添えられている。

一〇時はコーヒータイムで必ず毎日コーヒーを入れ、これにビスケットやおかきを添えている。

三時のおやつは、くずもち、ところてん、大福等の和菓子とお茶である。

小林家の食事は三食米食だが、お米は胚芽米を用いていること、朝には全員が果物と一合の牛乳（父と母は二合）を摂る事、果物を欠かさず朝晩摂っていることなど、栄養のバランスに注意を払っている事が分かる。そのために食費はかなり高いものになっていると孝子は記している。また、洋風の献立も随時取り入れて、食生活を豊かでバラエティのあるものになっている。

小林家ではコーヒーを飲むことも習慣になっている。この頃、流行歌にもなっている喫茶店が巷に出来てコーヒーの愛好家が増えてきたのではないだろうか（筆者の家庭でも、父がコーヒーをラシャの布で漉して入れてい

八月十日 土	八月九日 金	八月八日 木	八月七日 水	八月六日 火	八月五日 月	八月四日 日	朝食	お十時	晝食	お三時	夕食	備考
汁 里芋 トマト 牛リンゴ	塩昆布 トマト 牛リンゴ	汁 茄子 トマト 牛リンゴ	汁 つまみ菜 つかみ味噌 トマト 牛リンゴ	焼海苔 トマト 牛リンゴ	汁 茄子 トマト 牛リンゴ	焼海苔 トマト 牛リンゴ	朝食	お十時	晝食	お三時	夕食	備考
あげ餅	コーヒート かき餅	コーヒート フルーツ 蜜豆	コーヒート ランチオン	コーヒート ビスケット	コーヒート デザート	コーヒート デザート	お十時	晝食	お三時	夕食	備考	
焼ちくわ ちざりこんはやく (煮付)	キヌ新切	鰻飯	豆腐 (煮やつこ)	煮豆 塩鮭	再瓜 油あげ(煮付) うどん(父と孝三)	瓜七み 青葱蘇 三杯酢	お十時	晝食	お三時	夕食	備考	
小倉 ようかん	桃山	フルーツ 蜜豆	大福餅	糸切カンゴ	トコロテン	くず湯 砥松風	お十時	晝食	お三時	夕食	備考	
茶碗 茄子インゲン (味噌あん) 大口	生鮭フライ 里芋煮 すり柚子 マロン	焼豆腐 いかに煮付 めろか玉子とろ マロン	鮎煮肴 アイスクリーム 西瓜	天婦羅 大根おろし 水蜜桃	ナマリ節 茶せん 茄子 西瓜	ビフテキ いんげん 物吹芋 西瓜	お十時	晝食	お三時	夕食	備考	
<p>一、牛乳の 一(朝)祖母父母孝子各一合 更(毎夕)父母、若一合 何十年来つづけてある</p> <p>一、お十時のコーヒート 特務艦野登呂の艦長 坂本敏中佐がアメリカへ 重油をとりに行つた土産に 本場からもつて来たので おいしいところをセツセと 飲んだわけ</p> <p>一、以週 新しよるが赤漬 ... 考とらから 餛飩煮 ... 茶餅ひしを 木の芽佃煮 茶良漬瓜 蛤雨煮(伊勢女あげ) 等か色を在形のフタモ、曲物 からス瓶等々入れられ、食膳を かき付てある</p> <p>一、マロン(三ヶ)は各屋の農園 そののみやげ</p> <p>一、漬物の味噌、茄子、胡瓜の 糠味噌</p> <p>一、味噌は胚芽米</p> <p>一、味噌は辛味噌</p> <p>一、食物費中牛乳代、果物代 か他の費用より、非常多額 であるが、家族の知の上のことである</p>												

図-9 小林家の一週間の献立例(1935年8月4日~10日)

たその香りが今でも思い出される。親戚にはコーヒーの輸入を生業とする家族もあった。

この頃、一般の家庭でもカレーライスやチキンライスが日常食となり、その他の外来料理も献立の中に加わってきた。従って所有する調理器具や食器の数が急増した。

衣服の所有と収納

会社勤めの父と学生である孝子の日常の外出着は洋服であるが、フォーマルな場合と家庭の中での生活では和服も着用するため和洋両方の衣服を所有している。孝子が調査した時点で所有していた洋服は一点、一九三六（昭和一一）年の春から一九三八年春までの卒業後二年間に新しい洋服を、アンサンブル二点、アフタヌーン三点、ワンピース二点、スーツ一点、ブラウス二点、レインコート、オーバー各一点、セーター二点、スワガーコート一点の一点五点を新調した。既に所有済みのものと合わせると三〇点になり、この他に下着や帽子、バッグ等の付属品が多数所有されている。和服類では、下着も含めてざっと五三点あるが細かい付属品は含めていない。

常時和服を着用していた母と祖母については省略する。家族四人分の衣類はどのように保管されていたのだろうか。和服類は祖母の部屋にあるABCの三棹のダンス

がメインであるが、他に二棹の整理ダンス、衣装箱、茶箱、りんご箱にも分散して収納されていた。

今が行った一九二五（大正一四）年、夏の銀座風俗調査（図1参照）で洋服の着用が、男子で六七%、女子では一%となっている。孝子の家族では、一九三七（昭和一二）年の時点でも洋服を着用しているのは孝子と父だけで、母と祖母、女中は公私ともに和服着用である。

今後、欲しいもの

ピアノも蓄音機も所有していた孝子だが、これから欲しいものとして、電気製品を列挙している。換気扇、電気冷蔵庫、電気釜、電気洗濯機、電気掃除機、電動ミシン、携帯ラジオセット、電気柱時計であるとしてカタログの写



図-10 孝子が今後欲しいと思っている品々

真を切り抜いて添付している。一九三〇（昭和五）年に三菱電機が電気洗濯機や冷蔵庫の製造販売を始めており、電気掃除機も三菱クリーナーとして宣伝し始めている。また、孝子は低いベッドも欲しいとして、広々とした洋室の中に置かれた寝室のインテリアや写真を載せている。電気製品は当時、非常に高価なものであったが、知識階級の女性にとって生活の合理化とより高い文化生活に寄与するものとしての認識があったのであろう。孝子が憧れていた電化製品は、戦後間もなく国産化され、瞬く間に普及して、家庭生活の必需品となった。

おわりに

孝子が行った自家調査は一九三五（昭和一〇）年の夏から始めて一九三八年の初めまでの約三年間だが、それは両親が結婚してからの二五年に及ぶ暮らしの中で蓄積されたものの歴史でもある。この間日本は日清、日露の戦争の後、大正に入って第一次世界大戦に勝利し、欧米の生活文化にも目覚め、憧れを強めた時代でもあった。一九二三（大正一二）年の関東大震災以後、一九三二年の満州事変、一九三七年の支那事変^{*}と不穏な時代に入っているが、小林家の暮らしの中にはその影がまだ感じられない。

高学歴で知的な両親は、一人娘の孝子に高等教育を受けける機会を与え、その上、女子のたしなみとされた茶道、華道、盆景の習い事に精進させた。また本人の希望を入れて未だ高価であった輸入品のピアノを購入し、レッスンを受けさせている。

食事は和食を中心に洋風な献立も入り、コーヒーを毎日飲む習慣も見られる。特に新しい栄養学の知識のもと、家族は毎朝牛乳を飲み、果物の摂取を欠かさない。洋風な食生活が入ったためにそれに伴う食器、調理道具が増加している。これに新しい電熱機器も多数購入されている。

孝子の家族はそれぞれ非常に沢山の和服を所有している。それに加えて父と孝子の日常は洋服であるため、二重に所有することになっている。

椅子式の生活要求も始まって、カーベットや籐椅子セットも入ってくるが、住まいの広さは変わらない。収納空間の不足が生じ、生活の場がもって圧迫されることになる。八〇年前の孝子の考現学的自家調査はその矛盾の実態をよく現わしている。

^{*}当時の日本政府による公称。現在は日中戦争と呼ばれる。

（一九五五年生活芸術科（住居）卒業・元住居学科
専任講師・群馬大学名誉教授 はやし かずこ）

注

(1) 『モデルノロヂオ(考現学)』(今和次郎・吉田謙吉共編書)が春陽堂から一九三〇年に発売された。これに先立って、一九二七年には新宿・紀伊國屋書店で、吉田謙吉、荒井泉、小池富久と「しらべもの「考現学」展」を開催している。

(2) 「今和次郎コレクション委員会」工学院大学図書館に置かれ、荻原正三(工学院大学名誉教授)を中心にして大枝近子・黒石いずみ・塚原領子・長山洋子・前島諒子・林知子の七名で今和次郎の資料整理、並びに関連情報の発信を行った。二〇一五年三月に解散した。

(3) 「昭和初期の住まいと暮らしの考現学」展(二〇〇四年六月二日～二六日)を日本女子大学成瀬記念館で開催した。この時、孝子の論文の全体像が分かるパンフレットを作成した。

(4) 『ジャンパーを着て四〇年』今和次郎著 文化服装学院出版局。一九六七年に出版された本書は、今の生き方を知る上で興味深い。

(5) 『今和次郎文庫目録』工学院大学所蔵の文献目録、工学院大学図書館発行(一九九一年)

参考文献

(今和次郎と考現学に関する文献)

『今和次郎集』全九巻(考現学・民家論・民家採集・住居学・生活学・家政論・服装史・服装研究・造形論)(下メス出版、一九七二～一九七三年)

・今和次郎『新版大東京案内』(中央公論社、一九二九年・ちくま学芸文庫、二〇〇一年)

・今和次郎著、荻原正三編『欧州紳士淑女以外―今和次郎見聞野帖・絵葉書通信』(柏書房、一九九〇年)

・今和次郎著、今和次郎コレクション委員会編『野暮天先生講義録』(下メス出版、二〇〇二年)

・川添登『今和次郎―その考現学』(ちくま学芸文庫、二〇〇四年)

・黒石いずみ『建築外』の思考―今和次郎論』(下メス出版、二〇〇〇年)

・『今和次郎文庫目録』(工学院大学図書館、一九九一年)

(その他)

・棚橋源太郎『生活改善運動』『社会政策体系 9巻』(大東出版社、一九二八年)

・『渋沢翁と生活改善』渋沢栄一追悼文集(一九三二年)

・『住宅』(住宅改良会、一九一六～一九四三年)

- ・朝日ジャーナル編『昭和史の瞬間 上・下』（朝日新聞社、一九七四年）
- ・『ドキュメント昭和五十年史 1 大正から昭和へ』（汐文社、一九七四年）
- ・『ドキュメント昭和史 1 昭和初年』（平凡社、一九七五年）
- ・林知子・前島諒子「大正期における生活改善運動と住宅改善」『目白大学人間社会学部紀要』（二〇〇二年）
- ・林知子「関東大震災以後に見る生活改善運動と住宅改善」『目白大学人間社会学部紀要』（二〇〇三年）
- ・林知子「戦前・戦後を通じて見る農村地域における生活改善運動と住宅改善」『目白大学人間社会学部紀要』（二〇〇四年）
- ・石毛直道『日本の食文化史―石器時代から現代まで―』（岩波書店、二〇一五年）





Bloom as a leader.

時代を切り拓く卒業生

暮らしに根づいた社会運動家奥むめお

上村千賀子

はじめに

一九四七（昭和二三）年四月、新憲法下での最初の参議院議員選挙で、一〇人の女性議員が当選した。その一人奥むめおは、「奥さんを台所から国会に」という応援のもと「政治と台所」の直結を訴えて当選し、参議院議員を三期（一八年間）務めた。高度成長期の一九六二年、池田勇人首相にこれまでの生産者のための行政を改めて、消費者のために消費者行政を専管とする「生活省の設置」を要望した。その結果として一九六五年、経済企

画庁内に国民生活局が設置され、二〇〇九（平成二二）年には、消費者、生活者のための行政機関「消費者庁」が設置された。今日、全国の自治体にある消費者センターなどは、その流れの中で置かれたものである。

奥むめおは一九一六（大正五）年に日本女子大学校家政学部を卒業した後、一九二〇年に「新婦人協会」理事に就任して平塚らいてう、市川房枝とともに治安警察法改正を実現した。その後、名もない人々の暮らしの中でその要望を引き出し、政治的覚醒を促すための運動に意

義を見いだし邁進する。戦後は議員活動と並行して一九四八（昭和二三）年九月に主婦連合会、五六年には主婦会館を設立して生活者の視点にたった消費者運動の先導を続けるなど、暮らしに根づいた社会運動家としての生き方を貫いた。大衆の最も近いところで着実に仕事を続け、生活を政治に結びつけるシステムを創造したむめおの社会運動の軌跡をたどり、その不屈の実行力と行動の論理を検証する。



奥むめお〔1960年〕（中村紀伊氏所蔵）

I キャリア形成の基底要因

1 少女時代

むめおは、日本中が日清戦争の勝利の喜びにわかえっていた一八九五（明治二八）年一〇月二四日、福井市で三代続いた鍛冶屋を営む父和田甚三郎と母はまの長女として生まれた。家族は、祖父母、父母、兄弟姉妹七人（兄と幼死した弟、四人の妹たち）、職人とはあやが同居する大世帯であった。景気の上昇に乗って事業を拡大し、のちに市会議員になった父は気性の激しい人であったが、新文化の吸収と子どもの教育に熱心で、むめおに与えた影響は大きかった。

母は封建的な家族制度のもとで忍従しながら生きて伝統的な女性であった。七人の子どもを産み、一九一〇（明治四三）年三三才の若さで亡くなった。むめおは病身の母に代わって奉公人と一緒に早朝から晩まで掃除、食事の支度や妹たちの世話など家事全般を担う働き者の少女であった。機織りが盛んな福井で幼少の頃から身近に接した女工たちの生活は労働婦人問題に開眼するきっかけとなる。日常の生活世界で目にする織物工場に通う女工や母に象徴される不幸なまま一生を終えた女性たちに対して抱いた共感は、生涯を通して生活に根ざした社会運動を志向する原点であったといえよう。

むめおは義務教育が定着する時期に小学校時代を過ごしている。一九〇二（明治三五）年に花月尋常小学校に入学し、一九〇六年、福井師範学校附属高等小学校に進学した。附属高等小学校では知育偏重ではなく、日常観察を重視し生きた知識の習得を目指した教育がなされ、生活に根ざした思考と学習方法が培われる。家から学校までの距離が遠く、家事と勉強の両立は大変だったが、勉強が楽しく苦にならなかった。

一九〇八（明治四一）年から一三（大正二）年に学んだ福井県立高等女学校では、『青鞥』で評論家として活躍していた上野葉子をはじめ「ハイカラ」で「モダン」な先生たちから、新しい時代の息吹を感じることができた。高等女学校後半になると、良妻賢母主義教育が浸透し、むめおはその規範に拘束される教育に反発、教師に不信感を抱くようになった。そのため周りが勧める女教師養成の女子高等師範学校ではなく、羽仁もと子や相馬黒光らが学んだ明治女学校に入るのが夢だった。

2 日本女子大学校と人格形成

(1) 成瀬仁蔵の女子高等教育論

一九〇一（明治三四）年日本女子大学校が成瀬仁蔵によって創立される。これに先立ち、成瀬は女子大学校設

立運動の第一歩として『女子教育』^③を出版して、女子の高等教育の必要を提唱し、女子の自立を促す幅広い人間教育の理念を掲げた。

そこには、①普通教育による人格養成を重視し、②女子を「人」として、婦人として、国民として教育」すること、③良妻賢母主義の教育理念は目的とする全体ではなく一部を指しているに過ぎないと指摘し、「家」に固定された良妻賢母ではなく、女子の全人的な教育の重要性を主張、④天職の範囲は家庭・職業・社会活動と幅広い分野にわたり、個人がおかれた社会や個人の境遇により異なっており、何を天職とするかは各人の選択による、⑤天職を遂行するための全人的人格の養成は生涯にわたってなされること、⑥国家形成（社会変革）の主体としての女性に対する大きな期待、⑦男であること女であることは社会文化的な構築物であるとするジェンダーの視点が先見的に示されている。

このように、成瀬は、良妻賢母主義規範と女子高等教育無用論が主流を占める厳しい時代にあって、時代を超える先見性と世界を見渡す広い視野に立ち、現代にも通じる汎用性のある女子高等教育論を展開したのである。

(2) 和田むめおの人格形成

一九一三（大正二）年、むめおは日本女子大学校家政

学部に入學した。成瀬の『女子教育』を読み、その幅広い人間教育の理念に共鳴した父の強い勧めであった。しかし、せめて英文学部に入りたいというむめおの望みはかなえられなかった。

日本女子大学校に入學して、學業に励もうと張り切るが、授業やクラスの雰囲気になじめず、次第に授業を欠席するようになる。その理由を次のように説明している。

さっそく成瀬校長に面会して自分の意志を伝え、とくに倫理や経済の勉強がしたいと申しあげたら、まずは良妻賢母になるための勉強が第一とのお返事で、わたしは大変がっかりした。そのうえわたしが入った家政科は、その良妻賢母主義ばかりの授業で、ほとほといやになった。女子大というところは、それまでのわたしには想像もつかない世界だった（中略）クラスメートは皆裕福な家の娘であった¹⁾。

初めて飛びこんだ女ばかりの世界には、虚飾やへつらいがあつて一本調子の田舎者にはついてゆけない感じもあつた²⁾。

むめおは希望に添わない家政学部への入學、クラスメートが醸し出す雰囲気違和感をいだいた。加えて、創立一〇年目の日本女子大学校は、後に「女子高等教育最寒時代」と記されているように³⁾、學校運営が閉塞した

状況下にあつたこと、また校長成瀬仁蔵の関心が帰一協会など学外へと広がつていたこともむめおの期待を裏切り、授業から遠ざかる遠因となつていたのであろう。

しかし、成瀬校長の実践倫理の授業はむめおの人格形成に大きな影響を与えたことが、むめおの実践倫理の答案から明らかである。答案には、運動家として活躍してからのむめおの発言、行動姿勢との重なりを随所に見ることができ（後段の翻刻を参照）。また、図書館での読書三昧は成瀬が推奨した「自学自動主義の学習」の一つであり、成瀬の教育方針に則り、むめおは自分に適した学習方法を自ら選んで修養し人格形成を果たした。寮生活では料理の腕前を發揮して好評を得、第一回卒業生小橋三四が一九一五（大正四）年に創刊した『婦人週報』の料理記事を担当するきっかけをつかんだ。このように、自分の得意な分野を切り開くことによつて生涯キャリア形成への第一歩を踏み出す。

3 社会への第一歩——女工体験

女子大学卒業後、鎌倉で家庭教師の仕事に就く。そのかたわら参禅により自律を身につけ、女子大学校時代に没頭した観念の世界から離れ、実践の世界に導かれることとなる。一九一九（大正八）年、『労働世界』（主筆

加藤勘十)の記者となり、労働同盟会会員大会で女工問題について演説するなど運動家として頭角を現す。大杉栄、辻潤、堺利彦等と交流しその影響を受け、無産階級の問題に開眼する。なかでも注目すべき活動は、一九一九年、二三歳の時の富士紡績本所大平町工場(東京市本所区)での女工体験である。そこで目にした女工の生活の惨状からむめおは、労働・職業婦人は「賃金奴隷」であると認識し、その解放の必要性を主張するようになる。

4 結婚・離婚・子育て

一九一九(大正八)年、堺利彦の売文社^⑧で翻訳係をしていた詩人・奥栄一と結婚する。栄一は、社会問題・婦人問題を勉強し、むめおの思想形成に大きな影響を与えた身近な支援者である。家族関係は、「良人も妻も子供もが一つ宛の人格者として他を足場にせず(中略)伸びて^⑨いくことを理想とした民主的な家族で、封建的な家長制家族が大勢を占める当時としては例外的な「プロレタリアの共稼ぎ家族」であった。しかし、やがて性格と人生観の不一致により結婚生活は破綻を迎える。二人の関係をみると、奥は外向的・樂觀的・活動的・実践的・実務的な性格であるのに対して、栄一は内向的・悲観的・

非活動的・思弁的な理想主義者で、むめおを思想的に支援する役割を担ったが、どちらかといえば気の弱い性格であったという。離婚後も二人は友人として、子どもの親としての関係を生涯保った。

彼らの子育て・子ども観はどのようなものであったのだろうか。むめおは常に子連れで活動し、子どもとのふれあいがある仕事の原動力であった。そして、ゆくゆくは、子どもたちが自分の仕事を理解し協力してくれることを望んでいる。一方、栄一は、子どもを見守る相談役としてのぞみ、将来は百姓生活の中から芸術家としての生活を見つけることができたミレーのように一人前の技能をもった生産労働者として成長することを期待する。多忙を極める生活の中で、実際の子育ては、友人や地方から仕事を求めて都会に出てきた同居の若い女性たちの協力を得ておこなわれた。生涯追求した「生活の共同化」は、このようなむめお自身の「母子家庭」という現実生活の必要に深く根ざしていたのである。

II 暮らしに根づいた社会運動

戦前

- 1 婦人参政権運動(一九二〇―二二年 二五―二七歳)
(一)子連れの請願運動―新婦人協合理事として

第一次世界大戦後欧米諸国での婦人参政権実現の影響を受け、一九二〇（大正九）年、平塚らいてうの呼びかけにより参政権獲得を目的に設立された新婦人協会の理事に、平塚らいてう、市川房枝とともに就任する。主婦として執筆活動に専念する生活を望み、いったんは平塚の申し出を固辞するが、夫栄一の説得で参加の意志を固めたのである。平塚は奥の労働運動での活躍の実績と、栄一が評した「黙して語らざること石のごとき女」が運動に必要であると考えた。その期待に違わず、平塚と市川が運動から離れた後も協会の活動を継続し、機関誌『女性同盟』の刊行と国会議員への請願運動を子連れで展開する。

一九二一（大正一〇）年に日本最初の女性の社会主義者団体「赤瀾会」を結成した山川菊栄が、新婦人協会の運動を「労して益無き議會運動」と批判すると、むめおはこれに反論し、大衆婦人覚醒のための団結を呼びかけた。¹⁵ 貴族院で改正案を廃案にした藤村義郎男爵へ子連れで陳情した結果、治安警察法第五条中一部改正が実現、男子同様に女子が政談集会に参加する権利を獲得し、日本の女性運動史上に大きな足跡を残した。

（2）婦人運動の「後衛」へ方向転換

しかし、治安警察法第五条改正を成し遂げてむめおの気

持ちは晴れなかった。女性たちは何の変化も感じず、日々の生活におわれていた。そのときの気持ちを次のように記している。

わたしたちの運動は、婦人大衆の要望を満たすものではなかった。議會運動とはなんとむなし、寂しいものであつたらう。¹⁶

このような現実を憂い、貧乏と無知を退治して、すべての女性が婦人参政権を欲し政談演説を聞きたいと思える生活の基盤をつくる実践的な活動こそが必要だと痛感した。そして、一九二二（大正一一）年一二月、新婦人協会解散を機に参政権運動から離れ、婦人運動の「後衛」へと方向転換を図り、暮らしに根ざした活動に邁進することになる。

2 職業婦人社の設立と『婦人運動』刊行

（一九二三―四一年 二八―四六歳）

その第一歩が、翌一九二三（大正一二）年に下中弥三郎（平凡社創設者・社長）のすすめで始めた職業婦人社の設立である。職業婦人の支援を目的に機関誌『職業婦人』（後に『婦人と労働』、『婦人運動』に改題）を出版する職業婦人社の活動はむめお個人にとって生計をたてる手段であると同時に「学校ではない形態で展開して

いった教育運動的側面を強くもつ同時代の生活闘争の一つ⁽¹⁸⁾であった。

職業婦人社の設立は時代の流れに沿った社会的要請でもあった。一つには資本主義の発達を背景に都市中間層を中心に近代家族が成立しつつあった。二つには、一九一〇年頃から、知識・技術を必要とする「身ざれない仕事」の職業婦人（小学校教員、タイピスト、事務員、交換手、看護婦など）が登場し、関東大震災後急増したことである。しかし、低賃金のため経済的に自立できず、家計補助的地位にあった。むねおはこのような職業婦人の課題を解決するために、既存の「家」、「村落共同体」に代わる「共同体」の理念を提示し、その実現に向けたさまざまな活動を試みたのである。三つには、婦人雑誌の刊行ラッシュである。商業主義によって発行部数を伸ばす雑誌が大勢を占める中であって、自己資金と維持会員の会費と広告代によって、進歩性を保持した『婦人運動』⁽¹⁹⁾の編集に努める。その後、職業婦人団体（婦人タイピスト協会、看護婦会、助産婦同盟等）と連携し、その機関誌とすることによって購読層の増加を企てる。経営は依然として苦しかったが、社会主義を標榜した婦人の機関誌としてはどうかという堺利彦からの誘いを断り、いかなる主義・主張にも拘束されない「イズム」からの

自由に固執した。

一九二五（大正一四）年、誌名を『婦人運動』に変える。

この改題は、職業婦人対象の啓蒙雑誌から、無産家庭婦人、女工、女中、娼妓、学生などより広い範囲の一般無産婦人のための運動の準機関誌への転身を意図したものであった。機関誌は、著名人男女による寄稿欄と全国の働く女性からの投稿欄によって構成され、九割を占める地方の購読者へ最新の知識や情報を提供したので、女性の運動の羅針盤、購読者同士の交流と心のよりどころでもあった。このように、『婦人運動』は、一九四一（昭和一六）年七月の雑誌統合による終刊まで、地域リーダー輩出とネットワーク形成の媒体としてその機能を十二分に果たしたのである。

3 社会活動

(一) 女性による女性のための運動——婦人消費組合協

会運動 (一九二八―三〇年 三三―三五歳)

職業婦人社の運営のかたわら、無産婦人運動に関わるようになる。参政権運動と家事育児の両立の困難を自ら体験し、無償労働を強いられる家庭婦人は「家庭奴隷」であると認識するようになったことが無産婦人運動へ傾倒していった動機である。むねおによれば、無産婦人と

は、結婚していようとしていまいと働かなければ食べてゆけない人を行い、中産階級の主婦である有産婦人と区別する。そして、無産婦人運動は女性がそれぞれの立場から「ほんとうの、自分自身に立ち返る運動」であるとして、既成政党への請願活動を繰り返す婦選運動とは一線を画すようになる。

関東大震災後の一九二五（大正一四）年一〇月、新居にい格いたるの勧めで消費組合西郊共働社に参加して消費組合運動について学ぶ。西郊共働社は岡本利吉（消費組合運動、農村青年の育成をめざした社会運動家）の発案により関東消費組合連盟の別働隊として無産インテリを中心に設立され、クラブのように楽しい雰囲気をもっていた。一九二七（昭和二）年には家庭会が生まれ、家庭婦人の活躍が目立った。むめおはこの運動に熱中しのめり込んでいく。消費生活を通して社会のからくりを知る消費組合運動は家庭婦人にとって一番しっくりいく運動であると確信して、一九二八年に女性の手による女性のための婦人消費組合協会を赤松常子や丸岡秀子とともに設立し委員長に就任する。山川菊栄はむめおの婦人消費組合協会運動について「資本主義の根本の問題にふれずに、無産者運動から独立した体系で発達するやいなや、資本主義社会機構の補助的構成要素に墮する」と批判するが、

階級闘争よりも消費生活の合理化こそが資本主義に対抗する有効な方法だと反論し、党派を超えた無産婦人運動の統一を訴える。しかし、男性が主導する無産政党の党派的分裂の影響を受けて無産婦人運動も分裂、一九三〇年、設立二年目にして協会は解散を余儀なくされる。この経験から、無産政党の男性指導者に対して反感をもつようになり、男性に依存しない自立した女性運動を確立する意志を一層強固なものとした。

一九三一（昭和六）年の満州事変以降の国家総力戦体制進展下で、穏健派の婦人団体は国策に沿った活動に舵を取るが、このような穏健派と急進派婦人団体の両者を批判し、「婦人運動の後衛」として日常生活に根を張った社会変革への道を目指すようになる。解散を余儀なくされた婦人消費組合協会の活動は、戦後「生活を政治に結びつける」という明確な目標を掲げた主婦連合会に引き継がれる。

（２）生活の合理化・共同化の実現―婦人セツルメント活動

（一九三〇―四四年 三五―四九歳）

一九三〇（昭和五）年、全盛期を迎えた『婦人運動』からの収益や寄付金を元手に、東京市本所区林町に婦人セツルメントを設立し、生活に根を張った社会革命の道を切り開く新たな試みにのりだす。職業婦人社の事務所

を本所に移転し、同社の仲間（子持ちの母親）六人と保母三人で託児部を中心とした共同隣保事業を始めたのである。婦人セツルメントの設立はなによりも離婚後のむめお自身の実生活上の逼迫した必要に根ざしていた。開設の動機を次に述べている。

さしあたり、自分の時間と金子が欲しかった、安く買ひ物がしたかった、手近いところに子供を托ける處がほしかった、達者で働いてゐてさえ暮しに追はれてゐる者の一人として、達者で働ける間はとにかく、せめて病氣のとき、妊娠分娩のときだけでも心から暢々と休めるやうな安心がほしかった、避妊墮胎の自由がほしかった（中略）最もありふれた婦人の一人として、貧しい母として、職業をもつ労働婦人として、自分と同じやうな境遇にある婦人たちに呼びかける消費組合の仕事、職業婦人の協会、セツルメントの事業などにだんだん深入りしてゆきました。

むめおが追求した婦人セツルメントとは、天下一式ではなく下からの社会改造運動、社会教育機関であり、「婦人が働きつつ学び、学びつつ広い社会に働きかける所」「婦人の社会学校」である。運営は自治と協力主義に基づき、「才能のある人は才能を、金子のある人は金子を、暇のある人は労力を」出しあい、誰かが中心になって誰

かを雇うという雇用関係ではなく、平等な関係を保ちつつ協力することを方針としている。保育所には、藤村義郎男爵から子ども好きの青年まで多様な人々が協力した。子どもたちにおやつを提供する「おやつ会員」もいた。資金は維持会員からの寄付、事業収益やむめおの講演料で賄われた。

事業は、託児、相談事業（保健指導・妊娠調節）、夜間女学部（高等女学校程度の内容で、実際に役に立つ教育）、職業相談、和洋裁・授産と友愛部、母の会消費組合、子どもクラブ、宿舍提供、実習生養成、講習会等多岐にわたり、子どもの職業婦人、自営業従事者、内職・パートの底辺労働者の主婦等幅広い層を対象としていた。一人が週に一日働きあう社会事業として始めるが、人事、経済面で困難が多く、結局むめおが「最後の一人」として責任をとることになる。むめおにとつて、職業婦人社の『婦人労働』は理論と全国的なネットワーク形成の場、婦人セツルメントは理論を実践に移す場であり、両者は車の両輪であった。一九三八（昭和一三）年に母子保護法の制定に伴い母子ホームが併設され、婦人セツルメントの活動は拡充される。

（3）働く婦人の自主的活動の支援―働く婦人の家

（一九三三―四四年 三八―四九歳）



働く婦人の家:千草会
(独立行政法人国立女性教育会館所蔵)

むめおの社会活動は婦人セツルメントにとどまらなかった。働く婦人の自発的社会活動を奨励し、彼女たち自身による働く婦人の家の設立を支援し、そのネットワークを試みる活動へと広がっていった。きっかけは、一九二七(昭和二年)に職業婦人社の基盤拡充を目的に、図書雑誌新聞閲覧室、共同炊事・共同洗濯場、簡易宿泊施設を備えた娯楽休憩の場としての「職業婦人の家」の建設を提案し、募金活動を開始したことにある。²⁵⁾

一九三三年、職業婦人社の活動に共鳴する未婚の職業婦人たちが大阪働く婦人の家(ひまわり会)を自主的に

設立した。続いて一九三五年に東京働く婦人の家(千草会)が設立される。働く婦人の家は、自発的な相互協力により施設を充実させ、技能を互いに教え、学びあう機関で、教養的な科目、地位向上に資する科目、転職など職業に関する科目を学び、家庭生活と両立させる職業人としての確立を目指した。大阪、東京について、福井(みゆき会)、名古屋(葵会)、京都(勤労婦人協会)、広島(みのり会)がつくられ、むめおはその協力者・助言者となって支援する。一時期活発な活動を展開したが、働く婦人の家の設立にみられた女性たちの知的向上の意欲、自分の世界を広げたいというひたむきさは十分生かされることがなく、やがて戦争体制に突入したときに、国家への奉仕のエネルギーとして吸い取られる危機をはらんでいた。

職業婦人問題から無産家庭婦人問題へと活動を拡充するにあたり、むめおが力点をおいたのは、家族制度の改革よりも消費生活を中心とする生活様式の改革、すなわち家庭生活の合理化と共同化であった。また、子どもは家庭や親たちを離れた独自の活動の場を必要とする存在であるという子ども観に立ち、託児所、学習会、少年少女会を組織している。規模は小さいながらも、婦人セツルメントや働く婦人の家は、家庭の枠を超えた家事・育

児の社会化・共同化を実現し、都市住民の連帯を前提にした都市における産育と生活・学習のための共同体を創出したのである。

4 総力戦体制下での公職活動——働く婦人の条件整備

日中戦争が始まると、戦線は拡大の一途をたどり、国民生活は日毎に統制が強化されるようになった。逼迫した総力戦体制のもとで、女性には二つの役割が期待されるようになった。一つは家庭生活をあずかる主婦役割、もう一つは前線に赴く青壮年男子に代わる生産の担い手としての役割である。こうした女性をめぐる状況の中で政府は「婦人国策委員」として女性指導者を任命した。むめおが初めて「公職」についてしたのは一九三九（昭和

一四）年三月、大蔵省の貯蓄奨励婦人講師である。

同年一月労働力不足を補うために女子の労働参加の方針が厚生省から出され、むめおは厚生省労務管理委員に就任する。当時は工場法によって女子労働者の産前産後の休暇が認められていたが、職業婦人には保護規定がなく、農村婦人の労働過重も深刻であった。むめお等女性委員はすべての働く婦人に産前産後の保護規定を設け、幼児の保護施設をつくるよう要望したので、働く婦人の擁護はある程度実現した。また、大政翼賛会第五回

中央協力者会議では「女子動員の隘路打開のための家事挺身隊（仮称）組織」と「女性挺身隊専門の女子指導者の配置」を提案している。当時の発言をめぐって、戦後、むめおは厳しい批判を受けるが、自伝においてこの提案の意図を次のように説明している。

生活の合理化、社会化ということは、……家庭では男子も家事の一部を分担せよ、……暇のある婦人たちだつて同じく働かなければ不公平だ。……戦争によって避けられぬ負担と犠牲は、万人に等しく公平に分けられねばならない、と私は考えていた。²⁷

働く婦人の家や婦人セツルメントという形で試みた「自治による生活の共同化、社会化」というむめおの理想は、戦争という特殊な状況下でゆがんだ形で表出し、ただ「戦争に勝つため」という目標のために実現化の一步を踏み出したが、戦後、「主婦の団結」「台所と政治」というスローガンのもとに新たな形で実現することになる。

戦後

5 参議院議員として——奥さん、国会へ——

戦後、配給物資が滞り闇取引が横行する中で人々の生

（一九四七—一九五五年）五二—六九歳



国会予算委員会で発言する奥むめお〔1962年〕
 (独立行政法人国立女性教育会館所蔵)

活は混乱を極めた。むめおが最初に始めたのは疎開先の
 上野毛での生活協同組合活動の再開である。ついで、周
 囲の熱心なすすめを受けて、戦後初の参議院議員の選挙

に「台所と政治を結ぶ」をスローガンに掲げて全国区から出馬して当選、文字通り「奥さん」が「国会」で発言を続けた。三期一八年間参議院議員を務め、「消費者」代表として発言する。一九四八（昭和二三）年には「消費生活協同組合法」の制定に尽力した。

さらに冒頭で紹介したように、一九六二（昭和三七）年、池田内閣に「生活省」の設置を要望した。これは人々の暮らしのなかのさまざまな要望を引き出し、生活を政治に結びつけるための消費者、生活者のための行政機関である。今日の消費者行政の土台を築いたことは奥むめおの参議院議員としての最も大きな仕事であった。

6 主婦の団結——主婦連合会の設立

（一）マッチから火がついた「主婦大会」運動

議員となったむめおは、消費者としての主婦の声を結集する組織の必要を痛感していた。経済安定本部からの要望もあり、主婦の経済的関心を高める運動に取り組む。牛肉の不買運動で闇価格引き下げに成功した大阪主婦の会の活動をきっかけに、婦人団体のリーダーが結集して、一九四八（昭和二三）年九月三日社会事業会館で「不良マッチ退治主婦大会」を開催、会場に持ち込まれた不良マッチを優良マッチに取り替えさせた。やがて主婦が実

物を提示して業者に詰め寄り改善させる「主婦大会」は療原の火の如く全国に波及していった。

(2) 「主婦連合会」の結成

「主婦大会」に参加した主婦の動きはめざましかった。自然発生的に次々と団体が生まれ、団体をとりまとめるために「主婦の会運動発起人会」が開催される。九月一五日の大会でむねおが代表に選ばれ、「主婦連合会」という正式な名称が決められた。主婦連合会による「主婦大会」の呼びかけは全国に広がった。一二月の「物価値上げ反対全国主婦総決起大会」では、四〇〇〇人の主



自由ヶ丘駅前街頭主婦大会〔1948年〕
(独立行政法人国立女性教育会館所蔵)

婦が日比谷公会堂を埋め尽くし、「主婦の歌」の合唱が繰り返される中、年末物価値上り防止、警察当局の取締まり強化、木綿布の配給増加、主婦による優良店選定を決議して、物価庁に提出した。「団結」と書かれたプラカードを先頭に居並ぶ主婦たちの姿は勇壮そのもので、まさに戦後最初の主婦の示威活動であった。

(3) 「たのしい闘い」——『主婦連たより』

『主婦連たより』第一号（一九四八年二月五日）では「たのしい闘い」と題して「主婦の会」運動について次のように述べている。

長い歳月をあきらめて、家族相手に愚痴をいうか、台所の片隅でため息をつくより外なかつた主婦たちが、團結して声をあげることにより、また日頃の問題をみんなで話し合うことに依つて焦点をつかみ、それを社會の輿論として解決してゆく道を知つたことは家庭の婦人たちにとつて非常な希望の到来である。

ここには女性たちが自分の力を發見した喜びこそが「希望の光」であると確信し、戦後の混乱と生活の困難に立ち向かう主婦連の運動を「たのしい闘い」として呼びかけるむねおのリーダーとしての心構えが示されている。

(4) 主婦の夏季大学

主婦連は職を立てて戦うばかりの圧力団体ではない。活動の神髄は、家庭生活における主婦の実際的なニーズを把握して焦点化すること、そのための実態調査と、学習機会の提供である。「夏はお母さんの勉強の月」として、一九四九（昭和二四）年から年一回主婦の夏季大学を開催している。

7 主婦会館の設立

官庁の一室の隅のテーブル、ビルの地下室などを転々として八年目の一九五六（昭和三一）年五月、東京四谷駅前に主婦会館が完成した。主婦会館は、買い物や勉強もでき、宿泊施設やクラブもある、大きなホールや娯楽施設、日用品試験室を備えた消費者運動の拠点で、「働く婦人の家」以来むめおが長年抱いてきた夢の実現である。「日用品試験室」での商品テストは数多くの立法化に結びついた。総工費一億二千万円、その資金は企業や有力者からの寄付（一口二〇〇円）と全国の女性たちによる募金（一口二〇円）などによって調達された。

Ⅲ 奥むめおの社会運動の理念と戦略

むめおの社会運動の理念と戦略を以下のようにまとめ

ることができる。

(1) 婦人運動のとらえ方 婦人運動の目的を社会運動や無産運動との密接な関連でとらえ、「家庭奴隷」である無産家庭婦人と「賃金奴隷」である職業婦人は、共に自立性を奪われた人間以下の惨めな存在であるとして両者の解放をめざした。一方、市川房枝は婦人運動を社会運動と区別し、婦人運動の目的を男女平等の機会獲得に限定し、山川菊栄は階級闘争による資本主義打倒を男女平等の達成の前提条件としており、むめおの婦人運動の理念と戦略は市川、山川のそれとは異なっている。

(2) 生活の視点 「イズム」よりも人々の「実感からきた生きた要求」を重視した。無名の人々の自覚を促し自らが主体となって新しい社会を創造することが必要であると考へ、これらの人々と生活を共にする中で「生きた要求」を引き出し実際の活動の発想を生み出した。

(3) ジェンダーの視点 運動と「家庭生活」の矛盾・衝突という新婦人協会時代の個人的体験から、性別役割分業は男女の階級的差別であるとして、女性の経済的自立を重視し、仕事と家庭生活の両立を主張した。

(4) 良妻賢母主義批判と教育・学習の重視 良妻賢母主義は女性の経済的自立を否定する規範であるとし、その呪縛から解放するために実践的な学校外教育・学習の

場を創設した。

(5) 家庭生活における生命の再生産の復権 女性差別の原因を無償労働に求め、女性の価値を高める方途は、家庭生活における生命の再生産に意義を見だし、社会的価値を付与することである主張する。

(6) 家庭生活の合理化と共同化 職業と家庭の両立の条件として家庭生活の合理化と共同化を挙げる。また、両立には夫の家事分担が必要だと主張する働く婦人の声に耳を傾け、戦時体制下には「男女で家事を分担し、妻の時間を圧迫しない共同生活」を提案している。

(7) 社会的主体性の視点 女性の自発的な社会活動の意義を説き、社会形成への参画を奨励した。家庭婦人にとつての社会活動の効用は、仕事の合理化・能率化をすすめ、広く社会を知ることにより自律を確立することができることにある。職業婦人では、職業生活の倦怠を救い、職業問題を解決に導くことができるとしている。

(8) 産むも生まぬも女性の自由を主張して婦人セツルメントの中で保健指導の一環として妊娠調節相談をおこなっている。

(9) 母性保護の制度化を目指した公職活動をおこなった。

(10) 仲間との関係性 むめおが運動で最も重視したの

は自律した個人の平等な関係に基づいた仲間との連携・協力である。婦人セツルメントでは、適役の人が金子のかわらない仕事から始め、雇用関係ではなく、平等な関係を保ちつつ協力した。社会運動は、個人の不幸と怒りとを社会的に解決しようと協力する心、その心の繋がりがあって初めて成り立つとする。加えて、金子、地盤、社会的地位よりも必要なのは明確な理念であり、男性を含む仲間や他の組織・団体との対等な連携であると確信し、これを実行に移した。キャリア形成の節目には常に女性に加え有力な男性の支援者があらわれ、知的・経済的にむめおを支えたことは注目すべきである。実際に、むめおが子育てと職業活動と社会活動の鼎立の苦難をのりこえて進むことができたのは、婦人セツルメントや働く婦人の家に参集した人びとの協力の賜であったのである。

おわりに

奥むめおは、生活の視点に立ち、女性問題の実態に即して実践的に社会運動を展開し、仲間・支援者が相互に尊重しあう対等な関係性を保持した新しい団体・組織・共同体の形成を目指した。運動を進めるにあたって、日本女子大学校で学んだ知識を咀嚼して再考し、批判的・

実践的に婦人運動や消費者運動に応用していたといえるだろう。たとえば、「日本女子大学校では、銀行、製菓、園芸、牧畜などの各部や購買組合を設置し、学生に経済的学理を実際の事業の中で体験させている」⁽²⁶⁾が、それはむめおの実践と重なる。また、奥むめおの生涯キャリア形成をたどると、家庭生活、職業活動、社会活動とともに女性の重要な天職として位置づけ、生涯にわたる女性の能力養成によって新しい女性の出現を期待した成瀬仁蔵の女子教育観が反映されていることが明らかである。そして「賢婦はこの世にあり得べきものにしてまた為らうべきものなり」と述べ、学生自らが自分の道を切り開き社会形成に参加することを期待した成瀬仁蔵の理想ともつながっていると見える。

(一九六四年英文学科卒業)

群馬大学名誉教授 うえむら ちかこ

注

(1) 一八九五〜一九九七。本名は奥梅尾(旧姓和田)、父はムメオと記述していたが、婦人運動時代からペンネームとしてむめおを使用。本稿ではむめおで統一する。

(2) 女性工場労働者を意味する歴史的用語として使用する。

(3) 青木嵩山堂、一八九六年

(4) 奥むめお『野火あかあかと 奥むめお自叙伝』(ドメヌ出版、一九八八年) 26頁

(5) 奥むめお『私の履歴書』(『私の履歴書 第六集』日本経済新聞社、一九五八年 204頁)

(6) 『日本女子大学校四拾年史』(一九四二年) 159頁

(7) 実践倫理は成瀬校長が担当する科目で、「現実社会において解決を迫られている課題に常に関心をよせて論ずる」ことを重視し、社会学的問題、婦人問題、労働問題についても講義している。詳細は、中冨邦「新発見史料『平塚らいてう』の答案を読み解く―成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の概要から考える―」(『成瀬記念館』29 二〇一四年) 参照。

(8) 売文社(一九一〇年一二月から一九一九年三月)は堺利彦が大逆事件後の「社会主義冬の時代」に生活費を稼ぎ、同時に全国の社会主義者間の連絡を維持するために設立した代筆・文章代理を業とする団体。

(9) 奥むめお「家庭の再建問題」(『婦人運動』10頁 一九三二年、5頁)

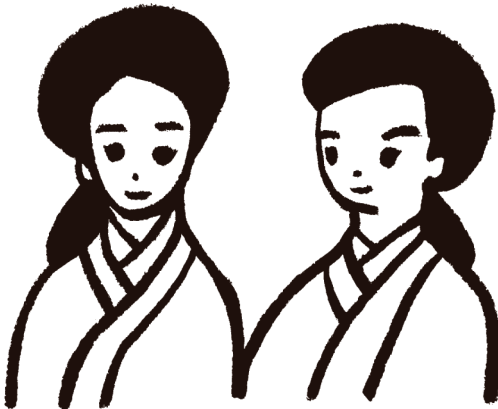
(10) 奥むめお「手紙三つ」(『婦人運動』8頁 一九三〇年、27頁)

(11) 奥むめお「子に依る感謝」(『婦人運動』8頁 一九三〇年、14頁)

- (12) 奥栄一「子どもの教育について」(『婦人運動』7、9 一九二九年、25頁)
- (13) 前掲『野火あかかと』46頁
- (14) 山川菊栄「新婦人協会と赤瀾会」(『太陽』27、19 一九二二年、136頁)
- (15) 奥むめお「私どもの主張と立場」(『太陽』27、10 一九二二年、150、153頁)
- (16) 前掲『野火あかかと』71頁
- (17) 前掲『野火あかかと』101、102頁
- (18) 橋本紀子「一九二〇―三〇年代日本の婦人運動と『生活教育』の主張―奥むめおと職業婦人者の教育活動」(日本教育学会『教育学研究』51巻2号 一九八四年、34頁)
- (19) 職業婦人社の維持会員には芥川龍之介、菊池寛、嶋中耕作、片山哲等の著名人二〇〇人が名を連ねている。
- (20) 消費組合運動のリーダー、戦後初の杉並区長となる。
- (21) 奥むめお「婦人消費組合協会に就て」(『婦人労働』6、5 一九二八年、23、26頁)
- (22) 山川菊栄「無産婦人としての警戒」(『婦人運動』6、15 一九二八年、27、28頁)
- (23) 奥むめお「新たなる建設に備へて」(『婦人運動』10、4 一九三二年、5頁)
- (24) 前掲『野火あかかと』135、136頁
- (25) 奥むめお「近事三題」(『婦人運動』5、7 一九二七年、16、21頁)
- (26) 鈴木裕子「『花ある職場へ』の陥穽―奥むめお」(『フェミニズムと戦争―婦人運動家の戦争協力』マルジュ社一九八六年、162、186頁)、成田龍一「婦人消費組合協会と婦人セツルメント」(『近代日本の統合と抵抗3』日本評論社一九八二年、249、258頁)、成田龍一「母の国の女たち―奥むめおの〈戦時〉と〈戦後〉」(『近代都市空間の文化経験』岩波書店、二〇〇三年、314、337頁)、他。
- (27) 前掲『野火あかかと』158頁
- (28) 真橋美智子「成瀬の職業観と職業教育」(『あなたは天職を見つけたか』二〇〇八年、38頁)
- (29) 日本女子大学成瀬記念館編『今後の女子教育』一九八四年、75頁
- その他参考文献
- ・市川房枝『市川房枝自伝戦前期』新宿書房 一九七四年
 - ・伊藤滋子「奥むめおにみる女性解放論の軌跡―母性と職業をめぐる」(『民衆運動と差別』雄山閣 一九八五年)
 - ・大寺恵美子「主婦層と消費組合運動―一九二〇―三〇年代婦人運動の底流」(『歴史評論』410号 一九八四年)
 - ・奥むめお『婦人問題十六講』新潮社 一九二五年

- ・奥むめお「我が国の婦人問題」(『社会問題講座第5巻』新潮社 一九二六年)
- ・奥むめお『台所と政治』大蔵省印刷局 一九五二年
- ・奥むめお『人間の記録51 奥むめお あけくれ』日本図書センター 一九九七年
- ・影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想』風間書房 一九九四年
- ・片桐芳雄「近代日本における個人性(個性)と社会性―日本女子大学創立者成瀬仁蔵の緒論を手がかりに―」(『愛知教育大学紀要』63号 二〇一四年)
- ・国立女性教育会館『暮らしに根づいた女性運動―奥むめおコレクション』二〇〇七年
- ・佐治恵美子「奥むめおと無産家庭婦人」(『歴史評論』359号 一九八〇年)
- ・進藤久美子『市川房枝と「大東亜戦争」―フェミニニストは戦争をどう生きたか』法政大学出版会 二〇一四年
- ・中畠邦『成瀬仁蔵』吉川弘文館 二〇〇二年
- ・中畠邦『成瀬仁蔵研究―教育の革新と平和を求めて』ドメス出版 二〇一五年
- ・長野和子「成瀬仁蔵の『実践倫理講義―日本女子大学校長成瀬仁蔵先生講話筆記』の検討から」(『日本女子大学人間社会研究紀要』19号 二〇一四年)
- ・原山浩介『消費者の戦後史―闇市から主婦の時代へ―』日

- 本経済評論社 二〇一一年
- ・古川奈美子『奥むめおものがたり』銀の鈴社 二〇一二年
- ・細川幸一『消費者政策学』成文堂 二〇〇七年
- ・村上淳子「奥むめおの志―『後衛』の思想」(筑波大学歴史・人文学系『年報日本史叢』二〇〇〇年)



〔年〕 和田ムメオの実践倫理答案

一九一三（大正二）年度から一五年度まで家政学部に在籍し卒業したむめおの答案は、現在一二点発見されている。いずれも、校長成瀬の講義を聴いた後で記して提出されたものであるが、答案の題名は以下の通りである。

一九一三（大正二）年度 一年

- ① 月日不明「自己調書」
- ② 六月四日「精神状態の変化、印象と発表」
- ③ 六月一日「天才について」
- ④ 六月二六日「修養が生活に及ぼした効果、夏休み中の修養とその決心」
- ⑤ 六月三日「汝もし自重心あらば他のもてる偉大なる点をも認めてこれを敬すべし」
- ⑥ 月日不明 「KAIKATSUNARE. I must be cheerful」
- ⑦ 一〇月一〇日「本能、自分の観察、学問の動機級の現状、自分との関係」
- ⑧ 月日不明 「実践倫理答案 読書の内容、目的、方法、感情・思想・意志に与えた影響、最近反省・瞑想・徹底したこと」

一九一四（大正三）年度 二年

⑨ 月日不明 「他人を受容する消極的な対人関係からより積極的な対人関係へ進むには」

一九一五（大正四）年度 三年

- ⑩ 五月四日 「エマーソン歴史論の要約と所感」
- ⑪ 月日不明 「暑中休暇中の経験」
- ⑫ 月日不明 「実践倫理答案 今後我が国婦人は、国民としての義務をつくすべきや」

本誌では、このうち②⑨⑫の三点を翻刻し紹介する。すべて初公開資料である。

一九一三年六月四日 精神状態の変化、印象と発表

近頃自分の精神状態が急変しつゝ、あると自分は思ふ、まづ第一にこれを書かねばならぬやうな気分があるので何よりこれをかきつけやう。

自分をはじめ女子大学生としてこの大きい門をくぐってから今日で五十有余日、初めの程は絶えず、内心密かに不平を抱いてゐたのである。実のところ、自分の心にはつまらないといふ感が充ち充ちてゐたのであった。来る前まではどんなにいゝ、哲学上の議論もきかれる事だらう、多くの有識の先生たちの議論は——どんなに自分の

心をひく事だろなど、いろいろにえがいては一人ほ、えみ、うれしさに胸おどらしては入学許可書を手にし、又この一片の紙の中にでもこもつてゐるかも知れないその楽しいうれしい望みある女子大学校といふもの、匂ひをかぎたいとつとめたのであつた。

学校では、家事の講義をきいた、化学の実験も見せて貰つた、園げいの話しも中々自分の興味をひいた。心理も倫理も又それ相応に自分の心を吸ひつけた、とは云えそれらは中等程度の女学校にてきいた事見た事とそんなに差を見ることは出来なかつた、自分の心にはまづ不平がわいた、失望の影もおそつた。自分の好きな国文科の授業時間さえ二時間しかないではないか、自分は一体こんな事に齷齪してゐてどうなるんだらうかと、夢の様な卒業後の事にさえ思ひを運んで悶えた、講義さく時間よりさういふ事に苦んだ時間がどれだけ多かつたか知らぬ……近頃に至りて自分の心理状態(?)は一変した、……自分にはつい先頃まで今日はタテの会あしたはよこの会、又曰く修養会、発表会、など、毎・毎・惜しい惜しいタイムを削り去られるのがどんなに苦しかつたか知れぬ、さて会にのぞむ——自分は人のねごとをきいてゐるやうにしか思はなかつた、そういふやうに人のなしをきいてゐるよりは自分といふものにつき又は外界といふもの

のにつきて少しでも考えて見たならばどんなに有益になる事だろ、あ、こんなつまらぬ形式にすぎぬあの人のことばに耳をかたむけるべく黄金のタイムを失ふは何といふかなしい事だろなどいろいろ自分は思つて見た。その時分の自分の会すぎた後は只同じくどの人もどの人もそのことばのあとにつけたす、或ははじめにいふいかげのことばの、*ほんとに*とか、*意義ある生活*とか、*第十三回卒業生*とかいふ單語的な、くわしくその人にとひつめたら口ごもるだらうと思はれるやうな怪しい語や、あんな言葉は無意識的に、単に語調よくするために云つたりしたことばでなからるかと思はれるやうな、案外つまらぬことばの端くればかり妙に深き印象となつて残つたのであつた。自分は以上あげたことばがつまらぬとは云はぬが、(とは云えはじまるまでは只いやだとばかり思つてゐたけれどすみかける頃には何だか惜しい気がした事は事実にしてあらそう能はざれども)自分は一生懸命に発表してゐるその人の、意のあるところを見ずに、只その中の一言又は一句の小なる——ともすればあやふくなるそのことば——ことばのみ心をそ、ぎて半ば反抗的にこれを評して見たのだった。

そういふ自分ではあつたけれど共今日の自分はもうそうではない。もう全然とまでは行かなく共や、それに近づい

たのである、一週一度の修養会は大変にまたれて仕方ない。一週一度の寮会もまことにうれしくなった。好んで人の発表に耳をかたむける。時には講演集を耽読する。修養書を読む、自分にはこういうふ事がすきになったのである。しかし自分はまだ発表はせぬ、出来ぬのである。発表するべく余りに幼稚である。余りに修ようが足りない。人に云はすれば、幼稚なりとて止まるべからず、幼稚をつとめて大に至ると、自分も発表によりて高まりたいと思ふけれど、会にのぞめば、自分の意志を発表せんとするも外の人のことばがいろいろと永く考えられても自分の事をいひ出す時がない、自分は人の事を考えてゐる間に自分の事をするべきタイムを失してしまふのである。これは或は悲しむべき事かも知らぬ。しかし、そうして来ながらもほ長足（とは云ひがたいかも知れぬが）の進歩をしてゐるやうに考へられる自分といふものはこの幼稚な中は人のため考えさせられるだけで満足して進む事をつとめやうと思つてゐる。書いて長びいたけれど、要するに自分をして批評的態度を去りて、会といふものを好むやうになつたのはやっぱり威大なる力ある会のはたらきにして——又は一週一度の実践倫理にして又、読書のためにしてその力といふものはほんとに大なりと思つた。会は私をひきつけてしまつた。私をして

う二度いやだとかつまらないといふ考へを起す事はざらしむるに至つたのである。自分はこればかりでも、女子大学の意を知り又入りて効ありし事を切にうれしく思つた。

一九一四年 月日不明

自分ニブツツカッテ来ルズベテノ人ニ対シテ、或程度マデ順應——即チソノ人ニ対シテ、ソノ人毎ニ相当ニ、自分ノ態度ヲ相應セシメテ来タトイフコトヲ思フケレドモ、ムシロ、自分ノ他人ニ應對スル方法ハ、ソウシタコトデナシツ、アルトイフコトヲ思フケレドモ、更ニ一歩進ンダ、更ニ打開イタ即自分ノ消極的ナルコトヨリ出テ、積極的ニ、勇マシク、元氣ニ広ガリ行クコトハ出来ナイモノダローカ、コレハズット前カラノ問題デアッタケレドモ、亦自分ノナスベキコトトシテ忘レル時ノナカッタコトデアルケレドモ、自分ハ、今ニ於テ、同前ノ考エヲ抱カネバナラナイコトヲ悲シムモノデアアル、挑戦的態度デ、ズベテノモノヲ熔シコマウトスル広イ態度デズベテノモノニ打向カハネバナラヌトイフコトハ、殊ニ強ク自分ヲハゲマストコロノむちデアラネバナラヌト共ニ、亦、衷心ヨリソレヲ希ツテキルノデアアル。

真にその人を知っていないものは、その人にとりて適切であり、亦必要である事をなす事をしない。反つて間違ひのため不幸である事さえまぬがれぬ時がある。まことによくその人を理解してゐるものこそ、真実にその人のためによくあるべく導くことが、亦助けを与える事が出来るのである。萬事、物事の真相を見とほし得るの必要を思ふのである。全き理解なくして何事も、ならない事を思ふのである。

一九一五年三月八日（推定）

実践倫理答案

家政三年 和田ムメオ

今後我国婦人は、国民としての義務を如何につくすべきや（一個人としてではなくして、婦人一般としての中に自分を投じて、そのなすべき事を考えてみ、而して書きたり。）

（我邦婦人といふても、立派なものもあり、悲しむべきものもある。唯婦人なる者を抽象して来て考える時に吾念頭に来る一般的の或者が標準となり、起点となつて居る事を記しておく。）

我邦婦人の国民としての義務などと、大きい字を考えるだけが、すでに、自分にとりては、耐らなく苦しい。我

邦婦人に、国民としての一婦人といふ自覚が、そなはつて了つてゐるだろうか。どうか。否、それよりもう一歩前に、我国婦人に、婦人としての自覚（器械的、玩具的、骨董品的の意にあらず、真に婦人としての謂）が、そなはつてしまつてゐるか。更には、一体我国婦人は、一個の人間としての自覚を、そなへてしまつてをるか。どうか。

一個の人間として、生き得ない者に、何で、婦人としての声が出し得るものか。一婦人としての満足な呼吸が出来ない者に、何で、国民としての一婦人といふサムシン

グを感じする事が出来るか。かう、考えて来る時に、暗涙も禁じ得ざる程にさみしく、亦、今、国民たるべく、其使命を考え様とする事が、恐ろしすぎる様にも思はれる。

全てに對して、あくまで——徹底的に誠実であること、決して好加減を許さないこと、全力的になすこと、まづ第一に要する事は、これであると思ふ。どちらをむいても、婦人に訴えたいことは、唯、人間であれであると思ふ。そうなり得て初めて、婦人としての声も出し得、猶それに止まらずして、神と共にある人（婦人と云ふても差支なし）としての声も出し得る。勿論、国民としての一婦人たるべく、其使命とする處を考えないでは

やまないであろうと思ふのである。

けれ共、差あたりこのまゝ、でやむべきでもないと思ふが、故に、左の三条を抽出する。

一、婦人自身其身の修養をつとめること、

二、現在の国家の状態につきて、大いに改善のほこをさしむけ、日本国民としては勿論、ひいて、全人類の幸福増進にはかること。

而して、この点は、最も広きに渡れることであり、深きを要する事でもあると思ふし、亦、男子と相まちて、即、その力を相半ばし合つて、つとめるべき事であると思ふ。

三、次は、勿論男子と協働すべき事なること言をまたざれ共、重に婦人自身の力をまっつてゐるものであるとして、今後の国民のために、第二の国民養成のために、其力をなげ出して、死す共やまじいの念を持つること。

で、何よりもまづ、国民としての其義務を遂行せんとするには、国民としての自覚が必要であると思ふ。人間として生きるに、人間たるの自覚が必要であると等しく、国民として生きんには、国民としての自覚を必要とする事と思ふ。

そして第二の国民を養成せんとするにも婦人自身の人格が出来たならば忽ちに其方も成功するものと信ずるが故に、婦人自身の絶えざる修養、生長が必要である事をも思ふ。

現在の社会を改善せんには、広きに涉り、深きに至りて、現在の社会を知る事、及び、其の理想とするところを考へる事が必要であるであろう。知つて而して善に改める事、一歩も其理想に近からしめる事、勿論これは、一、二、三条共に適用するものと思ふ。

(資料の整理、翻刻はすべて上村千賀子による)



『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかつた新資料を順次発表する。今回は講話一編である。

式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話

1

四十五年度第一期始業式 — 明治四十五年四月十日 —

本校の第十二学年の始業式を行ふに当りまして、今年はいろいろな都合がありまして、新入学生の入学式を兼ねまして、殊に父母のお方、保証人のお方をも出来る丈けお出でを願ひまして、此に本学年の業を開きますこと

は、一同の深く喜びとする所であります。始めに大学部一年生、普通予科並びに英文予科及び高等女学校一年、小学校一年、幼稚園、今日始めて本校の門にお入りになりましたお方を本校の教職員一同喜んでお迎へ致す次第

であります。

そこで、教職員、高等女学校の先生、小学校、幼稚園の先生を御紹介致す筈であります。数の多いのと今日はまだ旅行から帰らないお方もありますから、夫れは省きまして、始めに、今日始めて本校の門にお入りになりましたお方を御紹介したいと思います。此に本年は例年と変わることが起りましたので、一寸皆さんに御紹介をしておかねばならぬと存じます。

新入学生総数四百二十九名

今日、新にお入りになった数は大学部（予科も入る）は235名、高等女学校一年120名、同補欠33名、総数153名、小学校、幼稚園は41名、大学から幼稚園まで新に入った方は429名であります。

高等女学校は五十名をこすことが出来ません。夫れで今日まで、地方からおいでになったお方も出来るだけお断りを致して居りましたけれども、遙々九州や北海道あたりから入学が出来ると思つてお出でになった方もある。調べて見ると、この卒業生の関係者であった。この様な人をお断りするのはお気の毒であり、他校に入るにも六ヶ敷い事情もあり、いろいろの方法を講じて定員は500名をこすことは出来ぬが、四年、五年となるとあき

が出来るから初級に数を増すことが出来る。それで断りにくい方だけを選び、120人を入れ、三組に分けました。毎年の例によりますと、いろいろおうちの御都合や御父さんの御転勤などによつて五十名から十名の欠員が出来ます。それで補欠を致しますが、本年は之れを止めて四十名を三組に編成することに致しました。

さきに幼稚園、小学校を出します前に明日、明後日、十三日及び二十日の式等につきまして一寸御報告を致しておきまして、今度新にお入りになりました皆さんに対して本校の主義、方針等をお話致します。

評議員三井氏の逝去につき弔意を表す

明日は此の女子大学の評議員の一人、三井三郎助と云ふお方が去る六日の午後五時に逝去せられて、明日午前八時半から葬式を営まれますので、本校土台の一人、評議員の一人、又、只今まで評議員中の監事と云ふ役をつとめられましたお方であるによつて、是れ迄の例によりまして、明日一日は業を休んで弔意を表することに評議員会、教員会で定めました。明日一日は其の心を持つて静粛に過される様に致し度い。

当大学の土台たる敷地を寄贈せらる

始め我が国に女子高等教育を起すと云ふ問題が起りまして、地を卜して女子の大学を設けると云ふ時に、第一に起りました問題は地の利を得ることでありました。其の時に於て大阪に東京に適當の場所を探して居るとき、此の三井三郎助君所有の土地がありました。氏は喜んでこの地を寄贈せられました。このよい土地を得ましたことが、この大学の位置が定まりました所以である。其の後、桜楓館、輕井澤の三泉寮、其の他未だ公になつて居りません家政学部の標本室、桜楓会の支部館、そゝ云ふ必要なるものを段々、君はこの学校のために尽さうと云ふ深い考へを持ち、非常なる熱誠を払はれて居つたのであります。そゝ云ふ關係の深いお方に対し、母校は斯う云ふ際に誠意を払ふことは当然のことであると思ひます。

その前に、發起人たりし近衛公が薨去の時も、其の御葬儀の時は全校は校前に迎へ、代表者は葬列に従ひました。この例にならひまして、200名許り御会葬致すことに決しました。

明後日は、即ち十三日卒業式の前日でありますから、其の準備、又は新にお入りになつた方は此の学校の主義、

精神につきよくお考へになり、寮舎等につき業を始める為の準備があるから、其の為に休みと致します。

二十日の記念式及三井氏の追悼会

二十日は母校の第十二回目の記念日に當るを以て、丁度三井氏が逝去せられたのでありますから、本校の評議員、其の他全校打よつて弔意を表し木植式を挙げたいと思ふ。其の時母校の主義、精神をわかる様に致したい。大切な時であるから、銘々其の用意をし出来るだけ完全にする様に致したいと思ひます。

本校の教育の目的及び主義、方針

初めに、新入学のお方に本校の教育の目的、其の目的を達する主義、方針等を一言申すことが必要であります。此の新入学のお方は半ば高等女学校に属するお方でありますが、其の大多数は猶進んで本校の大学の教育をうけよとする志のある方である。そゝでない方もこの校の附属高等女学校を望まれたことは、此の大学の空気を吸うて居ります其の主義、精神の世界に入つて感化をうけよと云ふことは主なる目的であります。故に大学の方のことを申せば、従つて高等女学校の方はおわかりになる訳でありますから、大学の方針

をあらまし申して高等女学校のこともつけ加へてお話をしたい。

高等教育の目的は如何

初めに、高等教育即ち大学程度の教育の目的は那邊にあるかと云ふことを、誰れも考へずには居られないと思ふ。夫れで最も広い意味で考へておいて、其の中でこの女子大学の目的はど一云ふ点にあるかと云ふことを考へることが必要であると思ひます。

先づ今日、世界を支配しております所の、国民の教育を目的として居る所の大学教育の目的は如何なるものであるか。之れについて様々の考へを持つて居る者がありますけれども、先づ其の国の情況、文明の發達の程度等によりまして各々異にする所がある。又、其の大学、大学によつて幾分趣を異にする所があるし、又あるべき筈であると思ふ。

大学は其の目的により四大別となる

大学の種類は大凡そ、四つ程に大別することが出来ると思ふ。

第一、大学の目的は真理の發見にある。学理の蘊奥を究める、即ち研究を目的とするものである。

第二のものは、真理を研究すると云ふこと。即ち思想力をねりまして人間の深さ、広さ、高さ、即ち人間のほんとの価値を増進すると云ふ、之れを他の言を以てすれば、人となり。又は人格を深くする、高くする、即ち其の人の価値を増進すると云ふこと。其の目的を達するに、最も其の品性修養に尽す。夫れを此の学校では精神修養などと申して居ります。即ち、最も人生を養ふ、品性を高尚にすると云ふことである。即ち、学問の目的は天より賦与せられて居る所の銘々の個性を發揮せしむるのである。

第三は、英国の大学などで最も行はれて居る所の紳士、淑女を作る。最も円満に、完全に調うた所の尊い人物を作るのである。

第四には、専門の知識、専門の芸能、即ち何かの専門の知識を得て、生活に欠くべからざる所の学業を授けることを以て目的とするのである。

我が国の教育は職業教育也

大学教育には此の四つの傾向があります。我が日本の東京及び京都の大学、其の他の私立大学は何れに属するかと云ふと、第四の職業教育に傾いて、品性修養と云ふ様なことは少しも顧みない。又、其の価値が学

生の価値の中には少しも加はらないのである。

我が女子教育の大勢

大学教育が其の通りでありますから、其の流れを汲む凡ての教育が同じ様になって、女子教育と云ふものも衣服を整へ、食物を調理し、其の他に必要な芸を授けることが女子教育とせられて居る。これ、我が女子教育の大勢である。

勿論、国民が何かの職業専門の技に長じて居る、家政をなすに長じて居る、女子が其の職業を完うするに必要知識、芸能をたくはへることは必要だが、この学校もそゝ云ふことを軽んずるのではない。併し枝をさかんにし、花を咲かし実を結ばせるには、其の根を健全にするでなければだめであります。

我が国の教育は根を忘れ、末に走るの事実が多いのである。折角立派な人間を作るの教育が、却つて其の試験の為に大事なる命を犠牲にする、其の本を枯らしてしまふと云ふ如きは、我が教育の為に悲しむべきことと思ふ。

我が女子大学の目的

それで先づ我々はこの日本の女子高等教育、ことに日本女子大学の目的は、人として其の本となる品性陶冶を

本とする。第二に国民として、第三に婦人として教育すると云ふことである。之れを又詞をかへて言ふならば、人類共通に人と云ふことがある。又、男とか女とか云ふ性がある。其の性に應じて完全なる人を養ふ、完全なる婦人、充分発現致しました所の個性を教育すると云ふこと。始めに申しました第二、第三の目的に含んで居ることを土台として教育するのである。

根本を養ふの教育

併し、其の本と雖も日常生活をはなれて出来るものはありません。故に最も日常生活に重きをおき、境遇改善に力を尽すことを重んじて居る。其の教育の土台はどこにあるか、その主義、方針がどこにあるかを御存じのことが最も必要と思ふ。其の様なことにつき、桜楓会の出版物、其の他により充分注意をして調べられ、今日迄の本校の境遇、働き等により観察せられますことを願ひます。

其の本をほんとに養うて居れば、枝葉は自ら出来る。二者共に並行して進まなければならぬ故に、極端にとつては間違ふのである。

本校教育の方針

そこで其の教育の目的を達するには、この学校はどいふ方法をとつておるかが問題である。

これ迄、高等女学校の教育に於て一番重んぜられたのは教授法で、教科用の本を読むとか、先生の方でも夫れを教へると云ふのが最も大切なこととなつて居りました。

大学にお入りになりましたも、人格の高尚なる教授の講義をきくとか、又専門に必要な書物を見る為に図書館を利用するとか、種々の機械を用ふるとか、いろいろのことを完うする為には非常に費用がかゝるのである。

此の頃、世界の大学のことを調べて見ると、大学生一人の一年の費用が六百弗と云へば千二百円。其の中どれ丈け月謝をとるかと云ふと、百五十弗で三百円である。英国のオックスフォードなどでは百五十人の生徒の頭に一人の校長が居ると云ふ比例で、其の又校長に准じた立派な教授が居ると云ふ訳であります。

そこでこの学校などでは、やはり基金を備へて最も高尚なる先生を段々ふやして行くこと、又夫れに依じて立派なる設備をすると云ふことが必要である。夫れで昨年末、澁澤さん、森村さんなどが随分其の為に尽して下さ

いましたが、なかなか思ふ様に参りません。それで止むを得ざる所は縮小し、品質を高めて行かねばならぬと云ふ必要も起りました。夫れで分量のことも、此の学校では構はんと云ふ訳ではない。

目に見えぬ所の精神である、生命である。之れが大学であります。併し之れの見えぬお方が世間には随分ある。故に、いろいろ説をなしまして、其の為にあなた方が此においてになる迄にいろいろ疑問が起つたことでありました。

人と人との関係を学ぶ

桜楓館、商業部、園藝部、購買組合、其の他いろいろ此の境内の天然の景色等いろいろあるけれども、人を作ると云ふ手段の要素は何であるか。人である。先生の人格である。寮監の気風である。学生諸君の行為である。其の間の関係から出来て居る所の校風である。寮風である。人は人によつてしか出来ぬ。精神は精神によつてしか作られぬ。此の学校へお入りになつてお学びになることは、人と人との関係である。併し、あなたを作るものはあなたである。あなたの中には大に發達すべき尊いものがある。夫れを見出だして、益々完全にお磨きなさらねばならぬ。夫れを發達せしむる為に、いろいろの係、

組等を作って共同一致の精神を作るよーに組織せられて居ります。夫れで、只人から貰ふばかりでなく、人の為にも尽さねばならぬ。

寮舎教育に重きをおく

そこで一番重きをおいて居るのは寮舎教育であり、一番選定に重きをおいて居るのは寮監である。其の外、卒業生から出来て居る所の、最もよくあなた方の相談相手になる所の指導者と云ふものもあります。

そこで地方からお出でになつたお方にお勧めすることは、出来る丈け寮舎へお入りになるが宜しい。校規によりましては両親の所から通ふの外、親類でも極たしかな所でなくては許さぬことになつて居ります。あなた方の安全である。又、あなた方の名譽の爲にも、此の中に入って生活をなさるのが一番宜しいのであります。夫れから序に申しておきますが、此の学校でも、寮舎のことについては余り評判は悪くあるまいと思ふけれども、世間の人は兎角人のよいことは喜ばないもので、いろいろ尾に鰭をつけて批難することが多い。けれども識者は此の寮舎制度をよしとせられ、文部省でも此の学校の寮舎制度をとられたことが多い。又、寮舎へ入ると大變費用がかかる、一人前一ヶ月五十円もいると云ふ噂を立てるものも

あるけれども、入つて見れば直ぐわかるのである。

この学校の主義は木綿を着、筒袖を着よと言はぬ。之れは弊となるからである。婦人は着物の品柄を選ぶこと、其の審美の教育もしたい。もし束縛があるならば、この様なことは出来ぬ。其の判断力、趣味を作ることは教育に必要である。併し質素に、儉約にしなければならぬ。

あなた方の飾りは外ではなくして、心の内の飾りにしなければならぬと云ふ訳にしております。そこで成るべく飾りは質素にする、身分相当にしなければなりません。夫れからあなた方寮舎へ入ると自分で献立を作り、自ら料理をなさつて、人の為にも進め、自分の為にも用いなければならぬ。そこで経済も上手にしなければならぬ。夫れは一厘から儉約をしなければならぬ。

此の辛い世の中に、毎月十数円と云ふ学費を親から送られるあなた方は、最も幸福な者であります。故に、其の上に花見遊山に行かうと云ふよーな考へはおこらないであろーけれども、よきが上にもよきを望むは人情である。けれども学費は決して定額より越えてはなりません。夫れは一厘と云ふことから注意をなさることが必要であります。

夫れからあなた方が不思議に思ふ事は会のあること、之れは自治機関となつて居ることであるから大切な

ことであって、夫れも過ぎるのは宜しくないが、今の教育の方針を全うする為に設けてあることでありますが、どーいふ訳であるかと云ふことをよく考へて観察せられる様に願ひます。

なほ申したいことはありますが、時が有りませんから後に追々申すことに致しませう。



二〇一五年度 展示の記録

●成瀬記念館(目白)

シリーズ『天職に生きる』

成瀬仁蔵と成瀬文庫展

成瀬文庫とは本学創立者成瀬が収集した書籍の総称で、和書四八一冊、洋書一九一

2015.4.8(水)
~6.6(土)



Beeton, Mrs. Isabella *The book of household management* London, Ward, Lock, 1899

九冊におよぶ。成瀬の没後、これらの蔵書は遺品と共に旧成瀬仁蔵住宅(現成瀬記念館分館)で保存されていたが、一九四四年には戦禍を逃れ

るため軽井沢等へ疎開させた。戦後、一九五一年に新築された泉山館塔屋の成瀬先生研究室及び記念室で保管され、一九六四年には図書館内に作られた成瀬記念文庫に移された。そして、一九八四年に成瀬記念館が開館すると、二階の図書閲覧室において展示されることになり、現在に至る。

本展では、成瀬文庫の蔵書を辞書、旅行ガイドブック、家政学、教育学、音楽等の分野にわけて展示、成瀬直筆の書き込み箇所等を紹介した。

軽井沢夏季寮の生活
大もみの木展

目白
6.12(金)~8.4(火)
-6.13-20-27
(西生田)
5.26(火)~8.4(火)

軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。今回のテーマは、大もみの木。

三泉寮の背後にある小高い丘に樹齢千年を超えるとも言われる大もみの木がある。この木の下で、成瀬とアジア初のノーベル文学賞受賞者であるインドの詩聖タゴールが講話を行ったことから、大もみの木は三



広岡浅子を囲んで

泉寮の象徴ともいえる存在になっている。

大もみの木は、一九八二年八月に上陸した台風一〇号により大きな被害を受けた。二〇一四年に行

われた樹木医の調査では、内部に大きな空洞が見つかり、腐食が進行している可能性があり、倒木や枝折れの危険性が高いと診断された。



本展では、大もみの木と本学の歴史を紹介するとともに、二〇一四年に行われた樹木医による診断の様子をパネルで紹介した。

日本女子大学に学んだ 児童文学者たち展

9.15(火)
～12.19(土)

日本女子大学は開校以来、多くの児童文学者を輩出してきた。本展では石井桃子、中村佐喜子、野村瓊子、いぬいとみこ、小蘭江圭子、安房直子、あまなきみこ氏を取り上げた。また児童学科で教鞭を執った与田準一、山室静、安藤美紀夫、吉田新一、百々



小蘭江圭子「おぼけちゃんシリーズ」挿絵

佑利子、初山滋、森比左志氏を紹介した。開催にあたり、あまなきみこ、安藤悦子、清水慎弥、谷口絃子、平川隆一、

百々佑利子、森比左志、山室茂樹、与田準介氏と東京子ども図書館、また本学児童学科川上清子、石井光恵、川端有子教授にご協力いただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

同時開催

収蔵絵画展 女子大学校創立の恩人

— 広岡浅子展

2016.1.12(火)
～4.8(金)

収蔵絵画展

広岡浅子展と同時開催。当館で収蔵している絵画から、浮田克躬・荻太郎・奥村博史・長田喜和・大橋了介・亀本信子・塩井福子・白瀧幾之助・西脇順三郎・堀市郎・山口都の作品、計二十二点を展示した。特に奥村博史が妻平塚らいてう（本学家政学部三回生）を描いた「明」が、来館者の注目を集めた。

女子大学校創立の恩人— 広岡浅子展

広岡浅子が成瀬仁蔵に宛てた書簡二〇通をはじめ、写真、自筆の短歌、寄附金簿など合わせて約七〇点の資料を公開。残された白黒写真を元に被服学科の卒業生が再現したドレス二着も展示した。無料配布用の

展示パンフレットに加え、『日本女子大学成瀬記念館所蔵 広岡浅子関連資料目録』を発行、図版のほか、書簡の翻刻、本学及び桜楓会関連刊行物の抜粋も収録した。

ドラマの人気を受け、旅行会社のツアーの見学も相次ぎ、会期を一か月余り延長、来館者は二万二五〇〇人に達した。テレビやラジオ、新聞、雑誌等でもたびたび紹介された。



にぎわいを見せる「広岡浅子展」

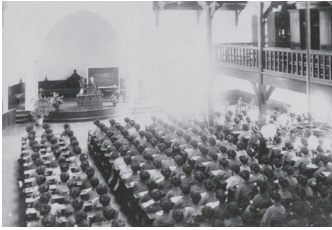


NHKの取材の様子

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「実践倫理」展

2015.4.8(水)
～5.19(火)



1911(明治44)年頃 成瀬による講義

創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は成瀬自身が教鞭をとり、最も重視した科目である「実践倫理」を取り上げた。成瀬は学校教育を「生涯進歩発達するための方法を学ぶ場所」と考え、学生に幾度もレポートを課し、自ら考え、意見を述べることを求めた。その後「実践倫理」は麻生正蔵、井上秀、大橋広と歴代校長や学長を中心に受け継がれ、現在では「教養特別講義」と名称を変え、学内外の様々な分野で活躍する方々の講演を聞く機会と

なっている。本展では、実際の講義を筆記した講話筆記録、平塚らいてうや宮澤トシの答案等を紹介した。

戦時下の青春展

9.24(木)
～12.18(金)



大人紙芝居「燃料戦時譜」

一九九五年に実施した「太平洋戦争と日本女子大学(校)学生生活」アンケート調査結果の再分析を基にした展示。「日中戦争期」、「アジア・太平洋戦争期」、「戦時下の学生生活」の三部構成とし、本学が中心となって開催した戦時家庭経済展覧会の資料や上演された大人紙芝居、学徒出陣壮

行会で持たれた校旗、エプロンもんぺ、戦時に書かれた日記、学園に関する防空関係公文書等を展示した。

日本女子大学のおひなさま展

2016.1.26(火)
～3.3(木)

恒例の「おひなさま」展では、かつて本学の学寮や卒業生宅等で飾られた、明治・大正・昭和の雛人形をご覧いただきたい。七段飾り三基のほか、「高砂」「舌切り雀」などの人形や、学寮で飾られた屏風を展示した。また、今回は本学家政学部の卒業生であり、附属中学校や高等学校で絵を教えた、長田喜和(一九〇二～一九九四)が描いた雛人形の絵を紹介した。色紙に描かれた小さな作品だが、本学ゆかりの「おひなさま」を新たに一つ紹介する機会となった。



明桂寮のおひなさま

二〇一五年度 業務日誌

- 4・1 「新任職員の集い」参加者見学（成瀬記念講堂も）、主事他説明
- 4・2 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者43名
- 4・8 展示オープン（目白・西生田）
- 4・13 NHK制作部スタッフ、美術・衣装のための資料収集のため来館
- 4・15 産経新聞取材（広岡浅子）
- 4・17 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）25名見学、説明
- 4・20 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者19名
- 4・21 「墓参のしおり」改訂版納品
- 4・22 主婦と生活社、広岡浅子関連書籍のための資料撮影（分館・講堂も）
- 4・28 附属中学校募参251名、教員12名見学。入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）4名見学
- 5・8 文京ミューズネット全体会議出席（杉崎）
- 5・10（土）「ホームカミングデー」につき平常通り開館、見学者67名
- 5・14 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）3名見学、説明
- 5・16（土）泉会定時総会につき延長開館、見学者15名
- 5・20 玉川台ウォーキンググループ35名見学
- 5・22 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）2名、教員1名見学、説明
- 5・26 展示オープン（西生田）。銃砲一斉検査
- 6・4 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）30名、教員1名見学、説明
- 5・8 大同生命、展示用資料撮影
- 5・12 展示オープン（目白）。ふれあいウォーキング26名見学
- 6・13（土）西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者9名
- 6・14（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者228名
- 6・15 解体工事のため分館家具運び出し
- 6・17 展示のため、大同生命に資料貸出（2016/1/8返却）
- 6・22 Preservation Technologies Japan
- 7・7 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）30名見学、説明。西生田記念室入口付近で雨漏り
- 7・8 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）10名、教員3名見学、説明
- 7・10 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）55名、教員2名見学、説明
- 7・14 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）13名、教員1名見学、説明
- 7・16 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）18名、教員1名見学、説明。全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（岸本）
- 7・23 『成瀬記念館2015 No.30』（2千部）納品
- 7・28 本年度当館受入れ予定の博物館実習生5名と事前打合せ
- 7・29 私立公立理学部研修会参加高校教

員9名見学

8・5 私立公立文学部研修会参加高校教員34名見学

8・7 軽井沢セミナー第1期(佐藤学長ゼミ)映像撮影

8・8 (土) 西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者273名。「キャンパス見学ツアー」参加者に説明(10回実施)

8・9 (日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者323名。

8・18 消防点検(講堂地下倉庫も)

8・20 光文社『女性自身』取材

8・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)及び保護者49名見学、説明

8・25~9・1 博物館実習(日本文学科5名)

9・12 (土) 附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき臨時開館、見学者246名

9・15 展示オープン(目白)

9・20 (日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者144名

9・24 展示オープン(西生田)

9・28 大同生命大阪本社・立命館展示見学

学(岸本・杉崎)

10・6 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)18名見学、説明

10・7 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため17名見学、説明

10・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)47名見学

10・7~9 全国大学史資料協議会2015度総会ならびに全国研究会に参加(岸本・杉崎、於仙台)

10・10 (土)~11(日) 西生田記念室十月祭につき特別開室、見学者合計108名。目白新聞取材

10・15 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)40名、教員1名見学

10・17 (土)~18(日) 目白祭につき平日通り開館、見学者合計521名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計56名

10・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)43名見学、説明。(1校)16名自由見学

10・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)65名見学、説明。附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」のため

96名見学

10・22 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)80名、教員4名見学、説明

10・23 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)74名見学、説明

10・24 東京新聞、「日本女子大学に学んだ児童文学者たち展」を取材、11月4日朝刊に掲載

10・31 (土)~11月1(日) 西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計37名

11・4 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)15名、教員1名見学、説明

11・5 防火訓練

11・6 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)24名、教員2名見学、説明

11・7 大同生命保険株式会社寄附講座講師・吉良芳恵教授(主事)他

11・9 燻蒸のため資料搬出(11/13終了、搬入)

11・10 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)25名見学、説明

11・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)29名見学、説明

11・14 西生田記念室、附属高校学校説明

- 会につき特別開室、見学者17名。日本女子大学知的探訪につき広岡浅子出張展示(西生田)
- 11・16 博物館実習の授業で学生施設見学。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)11名見学、説明
- 11・17 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)8名、教員1名見学。Pre-ervation Technologies Japan 脱酸のため資料搬出作業(12/18返却)
- 11・18 附属豊明小学校3年生120名見学。入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)61名見学、説明
- 11・19 文京ミューズフェスタ会議出席(岸本)
- 11・21 西生田記念室、附属中学校説明会につき特別開室、見学者5名
- 11・23 来年度展示のため、食物学科調理実習撮影(11/30・12/2も)
- 11・25 NHK出版取材
- 12・8 週刊朝日取材
- 12・11 西生田講堂運用委員会に出席(岸本)
- 12・12(土)「入試相談会」のため延長開館、見学者100名
- 12・16 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)23名、教員1名見学、説明。NHK文化センター横浜企画による大学訪問22名見学、説明
- 12・17 文京ミューズフェスタ22015於 文京シビックセンター)に参加
- 12・22 東京新聞、「女子大学校創立の恩人―広岡浅子展」を取材、1月4日夕刊に掲載
- 1・8 『日本女子大学成瀬記念館 広岡浅子関連資料目録』(2千部)納品
- 1・12 展示オープン(目白)。東京新聞「女子大学校創立の恩人―広岡浅子展」を取材、1月13日朝刊に掲載。NHKニュース取材、放送。クラブツーリズム「まち歩き」24名見学、説明
- 1・14 クラブツーリズム「まち歩き」27名見学、説明
- 1・15 毎日新聞旅行TOOKYO 大学博物館さんぽ25名見学、説明
- 1・16 クラブツーリズムバスツアー80名見学
- 1・19 クラブツーリズムバスツアー106名見学
- 1・20 NPO法人新現役ネット14名見学
- 1・22 クラブツーリズムバスツアー74名見学、NHK文化センター埼玉企画による大学訪問24名見学、説明。豊明こどもクラブ13名見学、説明
- 1・23(土)クラブツーリズム「まち歩き」23名見学、説明。西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於 西生田成瀬講堂)につき特別開室、見学者79名
- 1・25 B S 11「宮崎美子のすずらん本屋堂」取材、2月12日放送
- 1・26 展示オープン(西生田)。クラブツーリズムバスツアー46名見学
- 1・27 クラブツーリズム「まち歩き」28名見学、説明。産経ニュース(インターネット)、「女子大学校創立の恩人―広岡浅子展」を取材、2月4日ネットアップ
- 1・28 NHK文化センター横浜企画による大学訪問22名見学、説明。年金連盟桜川支部24名見学
- 1・29 クラブツーリズムバスツアー74名見学。クラブツーリズム「まち歩き」23名見学、説明。成瀬先生告別講演記念瞑想会にて講演(岸本)
- 1・30 クラブツーリズム「まち歩き」24名見学、説明

- 2・1～3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計105名
- 2・4 附属豊明小学校5年生37名、教員2名見学。NHKEテレ「先人たちの底力 知恵泉」取材、3月22日放送。読売新聞 YOMIURI ONLINE 取材、3月10日より公開
- 2・5 クラブツーリズム「まち歩き」110名見学
- 2・6 クラブツーリズム「まち歩き」24名見学、説明。クラブツーリズムバスツアー50名見学
- 2・9 江戸東京史跡散歩の会18名見学。NHKラジオ「マイあさラジオ」収録、2月12日放送
- 2・10 クラブツーリズム「まち歩き」25名見学、説明。大同生命OB26名見学、説明。赤旗新聞取材、3月6日掲載
- 2・12 クラブツーリズム「まち歩き」29名見学、説明。沼袋診療所友の会15名、新宿区高齢者学級連合会35名、自由見学。クリスマスチャン・トゥーデー取材、3月14日より公開
- 2・13(土) 西生田記念室、附属中学校新
- 2・16 入生保護者会につき特別開室、見学者40名
- 2・16 クラブツーリズムバスツアー92名見学。クラブツーリズム「まち歩き」34名見学。日本経済新聞取材、3月7日掲載
- 2・17 クラブツーリズム「まち歩き」16名見学。文京区ケーブルテレビ取材、2月29日～3月6日放送
- 2・18 クラブツーリズム「まち歩き」22名見学。朝日新聞山口総局電話取材、2月27日掲載
- 2・19 クラブツーリズム「まち歩き」16名見学。クラブツーリズムバスツアー23名見学
- 2・20 クラブツーリズム「まち歩き」29名見学、説明
- 2・22 附属豊明小学校3年生148名、5年生35名見学
- 2・23 クラブツーリズムバスツアー75名見学。クラブツーリズム「まち歩き」24名見学。日経カルチャー22名見学、説明。文京区成澤区長来訪。フジテレビ「みんなのニュース」取材、2月26日放送
- 2・24 京王観光22名見学、説明。クラブツーリズムバスツアー25名見学。クラブツーリズム「まち歩き」29名見学。三越伊勢丹旅行29名見学、説明
- 2・25 消防設備点検(講堂地下も)。桜楓会北支部他24名見学、説明。日経カルチャー23名見学、説明。クラブツーリズムバスツアー22名見学。クラブツーリズム「まち歩き」27名見学。日経カルチャー22名見学、説明
- 2・26 毎日新聞旅行20名見学。クラブツーリズム「まち歩き」26名見学、説明。クラブツーリズムバスツアー42名見学、京王観光ツアー22名見学、説明
- 2・29 豊明小学校5年生37名、2年生107名見学。『江戸楽』取材、4月号に掲載。「いきいきトラベル講座 女性実業家広岡浅子を学ぶ」(1回目)講師・吉良芳恵教授(主事)(於 埼玉県民活動総合センター)
- 3・1 三越伊勢丹旅行27名見学、説明。クラブツーリズムバスツアー167名見学。クラブツーリズム「まち歩き」22名見学、説明
- 3・2 クラブツーリズムバスツアー49名見学、クラブツーリズム28名見学、説明

- 3・3 クラブツアーリズムムツアー21名見学、説明。クラブツアーリズムムツアー17名見学。三越伊勢丹旅行31名見学、説明。ポテトツアー22名見学、説明。公益財団法人青雲塾講演会講師・吉良芳恵教授（主事）（於 青雲塾会館）
- 3・4 三越伊勢丹旅行30名見学、説明。日経カルチャー22名見学、説明。クラブツアーリズムムツアー43名見学。クラブツアーリズムム「まち歩き」26名見学、説明。卒業生のグループ見学、説明
- 3・5 富士観光24名見学
- 3・7 「いきいきトラベル講座 女性実業家広岡浅子を学ぶ」（2回目）講師・吉良芳恵教授（主事）（於 埼玉県県民活動総合センター）
- 3・8 銃砲検査のため大塚警察署より2名来館。クラブツアーリズムム「まち歩き」16名見学、説明。大同生命喜田会長来訪
- 3・9 クラブツアーリズムム「まち歩き」6名見学、説明
- 3・10 クラブツアーリズムム「まち歩き」16名見学、説明
- 3・11 クラブツアーリズムム「まち歩き」13名見学
- 3・12 BS日テレ「深層NEWS」取材、3月14日放送
- 3・15 阪急交通社ツアー11名見学
- 3・16 クラブツアーリズムム「まち歩き」27名見学、説明。阪急交通社ツアー10名見学
- 3・17 日経カルチャー10名見学、説明。クラブツアーリズムム「まち歩き」27名見学、説明
- 3・18 日経カルチャー20名見学。クラブツアーリズムム「まち歩き」27名見学。阪急交通社ツアー34名見学、説明。
- 3・19 クラブツアーリズムム「まち歩き」25名見学、説明
- 3・21（祝）西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者255名
- 3・23 阪急交通社ツアー16名見学
- 3・25 阪急交通社ツアー33名見学
- 3・26（土）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者976名
- 3・29 阪急交通社ツアー60名見学、説明
- 3・30 阪急交通社ツアー22名見学。文京区女性団体連絡会12見学、説明
- 3・31 まつうら編物学院25名見学。阪急交通社ツアー42名見学、説明

二〇一五年度成瀬記念館運営委員

佐藤和人館長（学長）、住澤博紀家政学部長、永村眞文学部長／成瀬記念館担当理事、山田忠彰人間社会学部長、吉井彰理学部長、川上清子家政学部通信教育課程長、坂井妙子教養特別講義1委員会委員長、松森晶子教養特別講義2委員会委員長、平館英子図書館長、三神和子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、高頭麻子生涯学習センター所長、小山聡子附属中高担当理事（副学長）大場昌子附属幼小担当理事（副学長）、蟻川芳子桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記念館主事、

二〇一五年度成瀬記念館構成メンバー

館長 佐藤和人、主事 吉良芳恵、館員 岸本美香子（主任）、杉崎友美、非常勤 石黒玲子（3月）、稲田真衣子（12月1日より）、梅原裕香（11月30日まで）、大門泰子、大橋有希子（6月11日）、加藤きよみ、小林芳子（4月～5月）、佐久間妙美（6月12日まで）、高橋未沙（4月10日まで）、永山由里絵（5月18日）、宮内量子、山本文子

博物館実習

2015年度の博物館実習(第26回)は、8月25日(火)から9月1日(火)までの6日間の日程で行った。実習生は日本文学5名で、企画展「日本女子大学に学んだ児童文学者たち」展の準備に参加した。
 実習生は、雑司ヶ谷霊園や雑司が谷旧宣教師館をめぐり地域の歴史を学ぶとともに、本学に縁ある児童文学者を紹介する解説パネルを作成した。
 このほか、西生田記念室の企画展「戦時下の青春」展において、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

業務統計

開館日数	目白	210日
	西生田	147日
入館者数	目白	約30000人
	西生田	約2000人
資料提供	学園史関係質問受付および資料提供	
		165件
出版・映像のための資料提供		93件

その他

- 『成瀬記念館2015 No.30』の発行 2千部
- 成瀬記念館展示のご案内(2015年度)の制作 3千部
- 『写真でみる成瀬仁蔵とその生涯』増刷 7千部
- 『広岡浅子関連資料目録』の発行2千部
博物館実習生受入れ(5名)
- 研修等参加(研究会・全国大学史資料協議会総会、同東日本部会総会、その他・文京ミューズネット、展示見学など)
- 資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一五年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

- 4・8〜6・6
シリーズ「天職に生きる」―成瀬文庫展
- 6・12〜8・4・6・13・20・27
軽井沢夏季寮の生活 ―大もみの木展
- 9・15〜12・19
日本女子大学に学んだ児童文学者たち展
- 1・12〜3・4(4・8まで延長)
同時開催
- 収蔵絵画展
- 女子大学校創立の恩人―広岡浅子展

〔西生田記念室〕

- 4・8〜5・19
シリーズ「天職に生きる」
―成瀬仁蔵と「実践倫理」展
- 5・26〜8・4
軽井沢夏季寮の生活 ―大もみの木展
- 9・24〜12・18
戦時下の青春展
- 1・26〜3・3
日本女子大学のおひなさま展

■成瀬記念館より

昨年度最大の話題は「広岡浅子」展です。一月一二日に展示を開始し、当初は三月四日で終了する予定でした。しかし大勢の方々が全国各地から来られ、真摯に展示を見て下さる姿に、展示期間の延長を考えざるを得なくなりました。結局四月八日までの延長に踏み切ったのですが、最後まで熱気のある展示となり、館員一同素晴らしい経験させて頂きました。入館者数は二万二千を超え、通常の三、四年分に相当する大盛況で、「百年に一度の展示」とつぶやいたのもあながち間違いではないような気がします。

会期中注目されたのは、卒業生の来館者が多かったことです。母校を誇りに思ったださったようで、責任を果たせたことに安堵しましたが、一方でテレビ離れの世代が育っているのか、現役学生の来館ははかばかしくありませんでした。

完売に近い『日本女子大学成瀬記念館所蔵 広岡浅子関連資料目録』の増刷をどうするか、まだ課題が残っています。(吉良)

ドラマ「あさが来た」をきっかけに、広岡浅子に関する資料や情報が少しずつ明らかになってきました。今後はそうした横の繋がりを模索していきます。浅子以外の加高屋関係者の書簡なども公開していく予定です。「と姉ちゃん」大橋鎮子さんの宣誓書や、今年百回忌を迎える土倉庄三郎翁についてもとりあげたいと思います。(岸本)

展示と並行しつつ、記念館資料の脱酸性化処理や二〇一九年三月刊行予定の『成瀬仁蔵発信書簡集』（仮）の刊行準備を進めています。脱酸性化処理は、資料の寿命を延ばすために不可欠なので、継続して進めて行こうと思っています。書簡集は基本方針と、第一巻に掲載する書簡が決まったところですが、これからが正念場です。(杉崎)

二〇一五年五月に着任し、主事や主任をはじめ先輩方の御教示を受けながら何とか一年目を過ごしました。「日本女子大学に学んだ児童文学者たち」、「収蔵絵画展」など、展示にも関わらせていただきました。まだまだわからない事だらけですが、少しでも多くのことを吸収できるよう、精進してまいります。(永山)

成瀬記念館 2016 No. 31

二〇一六年七月二日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

電話(〇三)五九八一―三三七六

FAX(〇三)五九八一―三三七八

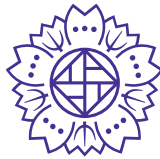
印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三二六―四

※無断転載、複製はご遠慮ください



日本女子大学
成瀬記念館